江戸名所図會

巻六

十七

839
20
57

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

下谷岡上野のあることを指とする

武蔵國風土記殘篇曰　豊嶋郡下谷岡貢鹿狩兎狸小鍋雉雀等又

貢暮蕭松脂云云

五條天神宮　東叡山の巽の麓瀬川氏のひとり齋神火廣名命

一座　本朝醫道の祖神なり五條天神と称す

北野天満宮を相殿とす　菅神の像は寛永十八年慈眼大師定眼ありしと社の相殿なり

當社は元の東叡山のうちなりしの寛永寺草創の御連

歌師瀬川習億の宅地なり迂させらるる

菊岡沾涼云其間地の上所

の夜向ふ神事を徹行す　毎歳節分

北國紀行云　正月の末ひさしく北のさとの思の出よ優遊しそうり　猛生の社

五條天神と申さとり折ふり粘るる茅原を焼そうり

繁りをそさてそれの巷の初草よ思ひの出の春ぞ忘れ　竟惠

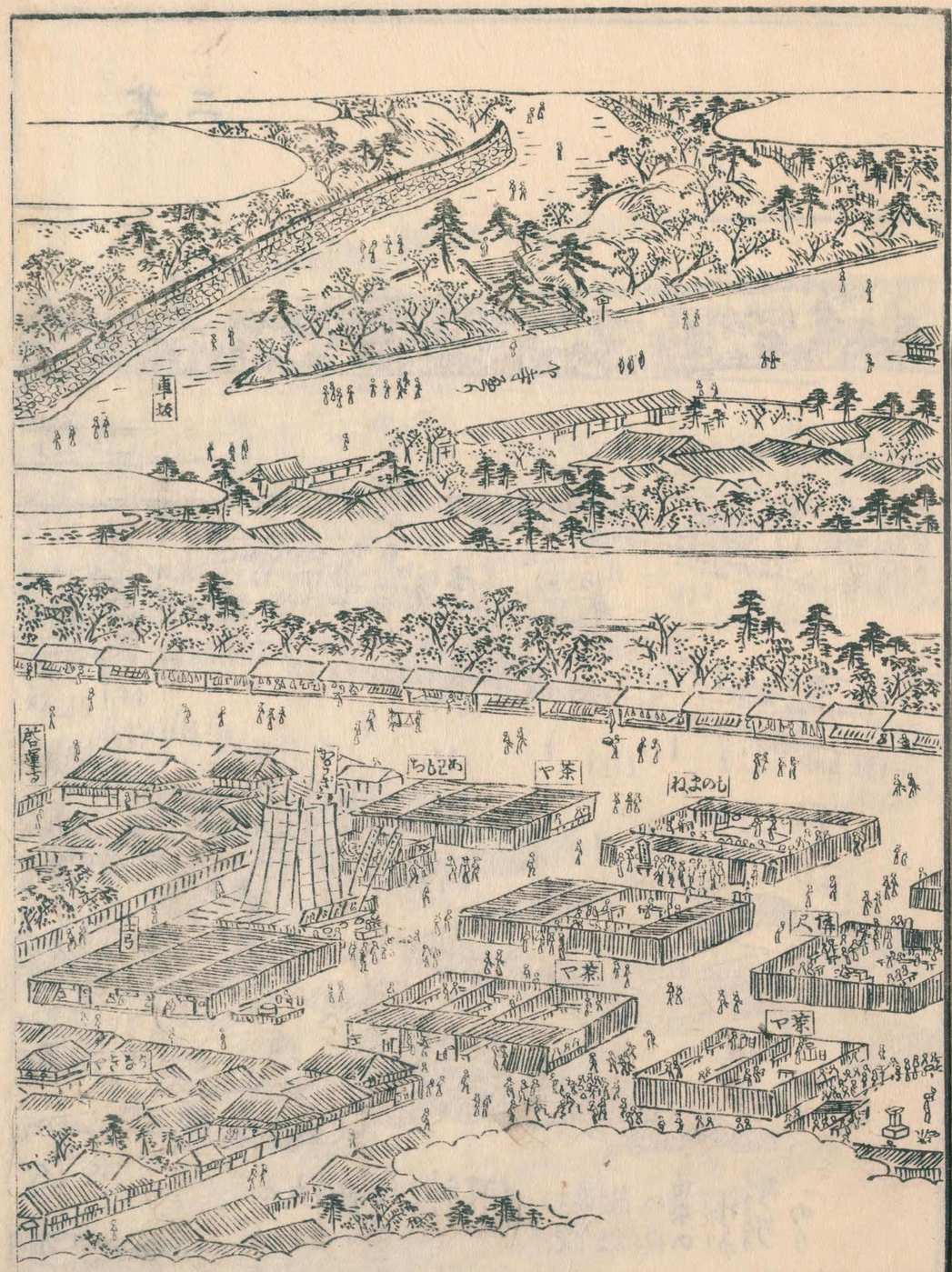
宝王山常樂院　長福寿寺と号す　天台宗五條天神の南思川の向

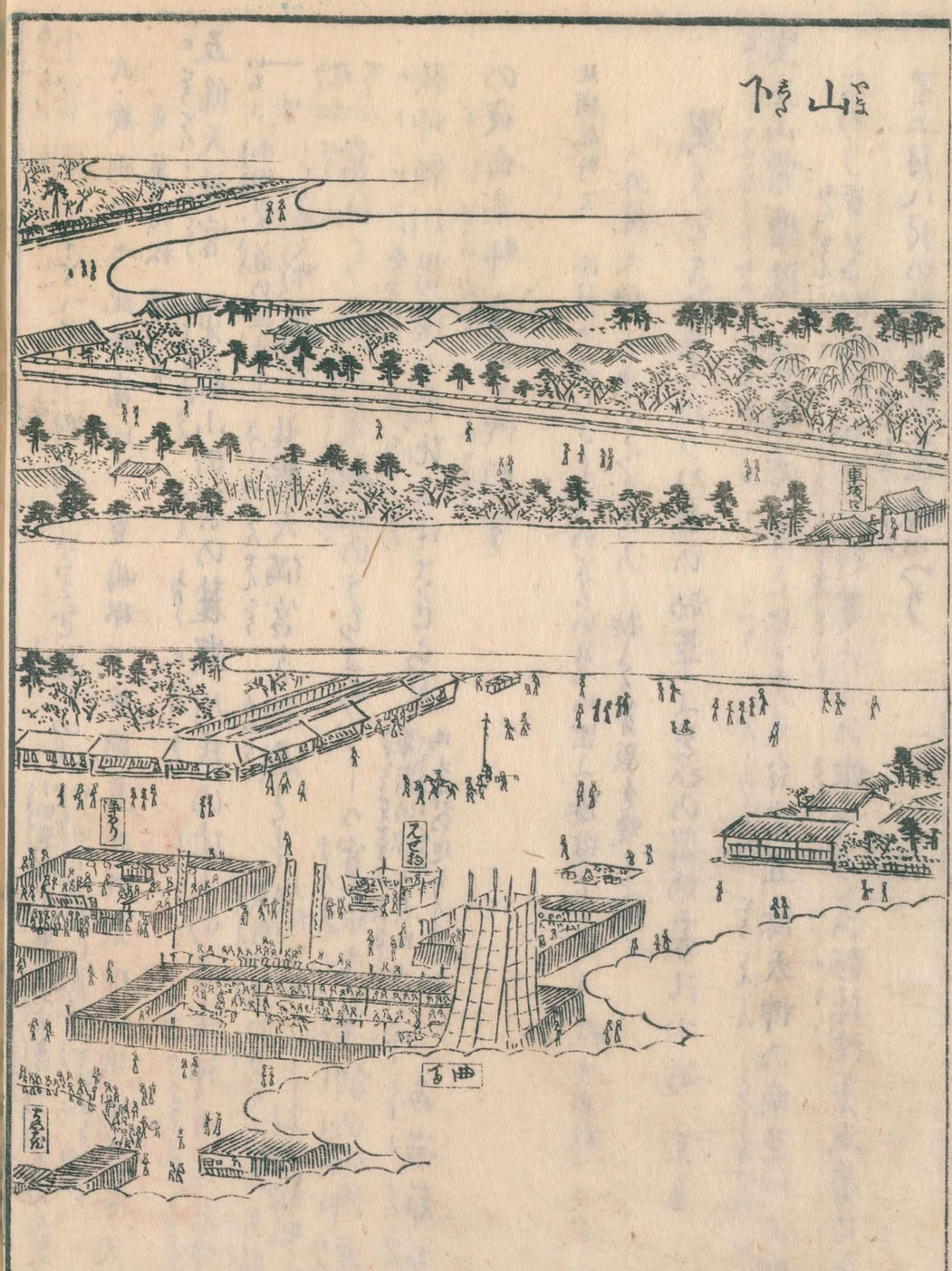
よりの牽茗阿弥陀如来の行基大士の作なり　西阿弥陀第五番目な

三月八月の彼岸中甚振わう

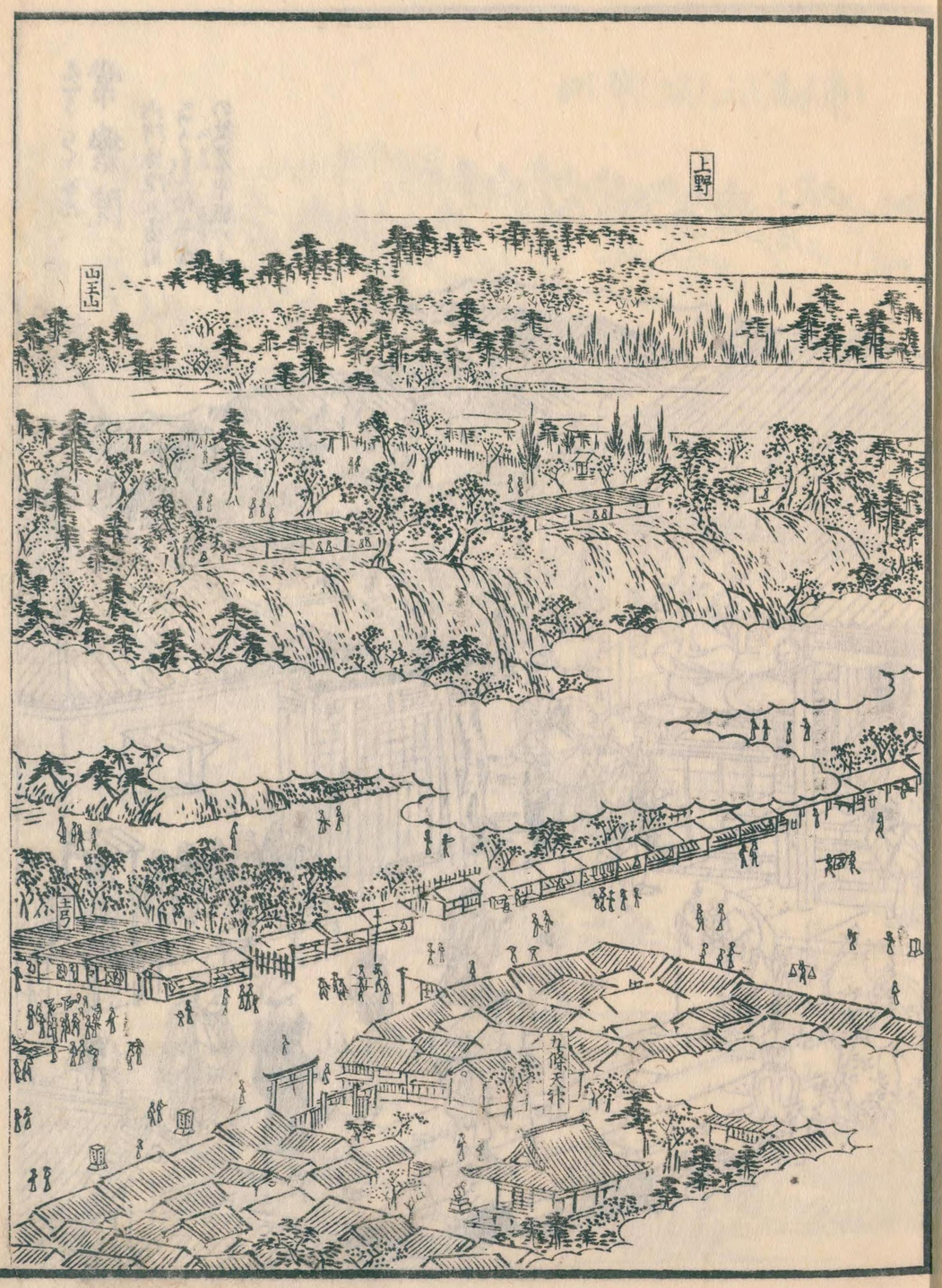
根岸信輔氏寄贈
曽山文庫

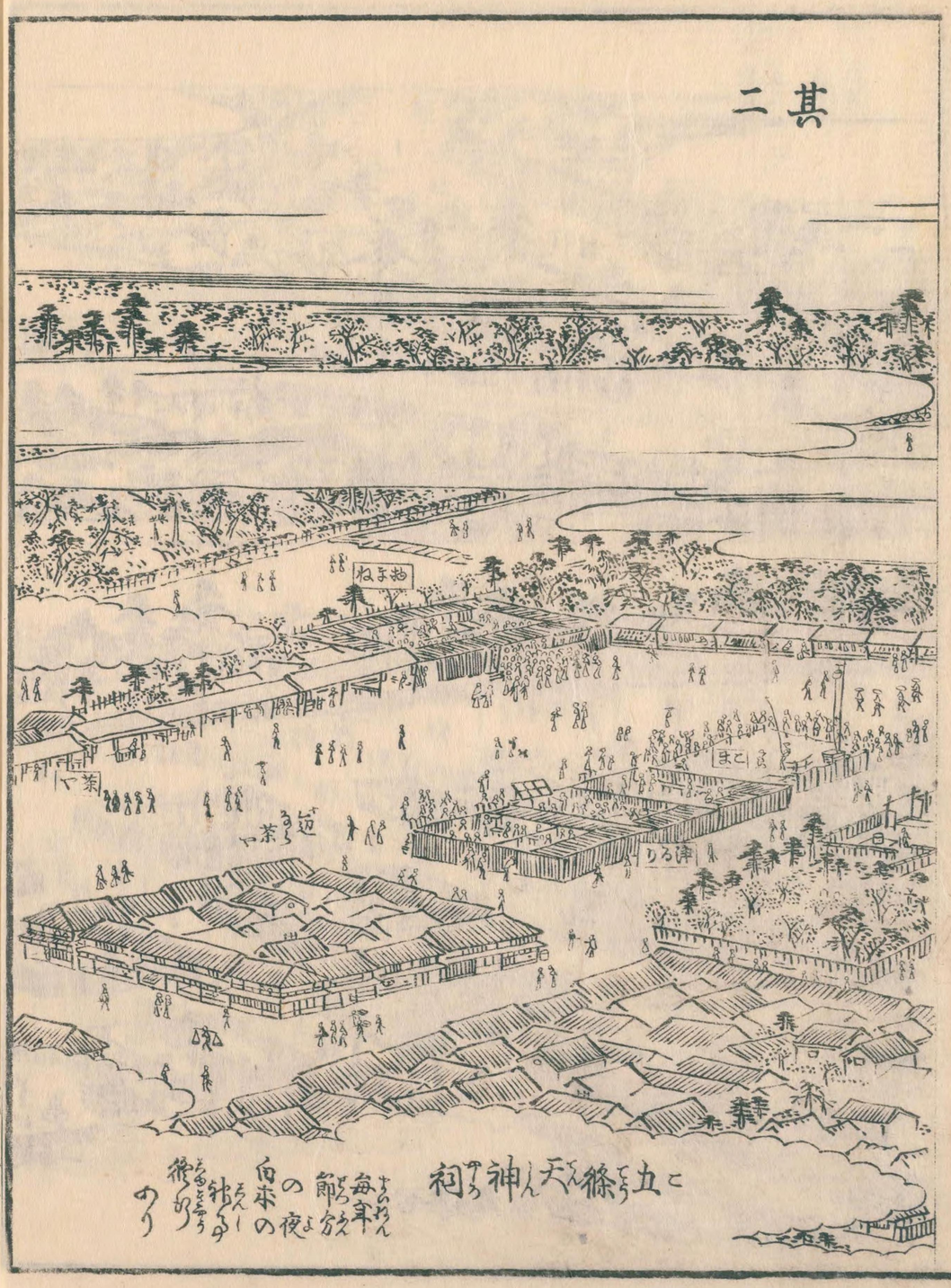
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

東叡山坂本口

上野

常樂院

六阿弥陀五尊因
みろくまち秋二度
の祇園中振い

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用

入谷
庚申堂
喜雲院と安穏
撰の伝教大師の
青面金剛と
同作の童像

金光山瑞玉院　下谷坂本壹丁目の南よりあり天台宗にして往昔八命
の　御御内大寺の辺りよりあり〳〵と慶長の頃今の地へ迯さるる往
古八三藐院と号けるを宝永年間今の名へ改ると云り當寺釋迦
の涅槃像の画軸一幅を藏せり慈眼大師の讃あり三國傳燈大
僧正天海書とあるもり毎年二月十五日是祝法さむ

藥王山善養寺　延壽院と号を同所坂本壹丁目の左側よりあり天台
宗にして本尊薬師如来を安置
相對當寺薬師堂　當寺八天長年中慈覚大師の草創本尊も同大師
の作なりと云へり額に圓満の二字を刻と黄壁水庵老人の筆なる
境内に鬼堂あり鬼王の像八運慶の作なり正月七月十六日祭
諸羣集と　或人云〳〵當寺鬼王の像八所外見利學校よりあり〳〵
小野照崎明神社　同所三丁目の右側よりあり奈神祭儀小野篁の
霊なりと云へり社傳あれとも詳ならす故に姑く略す當社八坂

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

本の鎮守なりて八月十九日を以て祭日とし別當は天台宗なり

小野山嶺松院と号す

或人云當社は其先是り出て堂あり頃その傍に小祠の神と稱す小祠の傍に其後彼地に移す堂の傍に建てるを堂陽島へ

く儒教を崇敬し別足利より學校を開く故に其後彼地に移す堂の傍に建てるを堂陽島へ

安し祭祀を執行とくよもすがらこの例に準じと思ふ

迄るの後今の地へ遷す又云當社の氏主稲荷の神の使者なりける白狐夜毎に尾の赤

黒ひかりを紀く台嶺の松樹に映しければ尾の先黒といふ意なり彼此混じ交へ小祠黒傍と

いふけるなりと云々

佛迎山安樂寺　金松あり正保年中正蓮社意的和尚當寺を創

立と　當寺は多恩院宮その朝法親皇　本尊は寶冠の阿弥陀如来なり洛陽

御宗居の舊地なりとなり

一心院の末なり　捨世一流の浄域なり晝夜不退念佛三昧あり

く殊勝なり

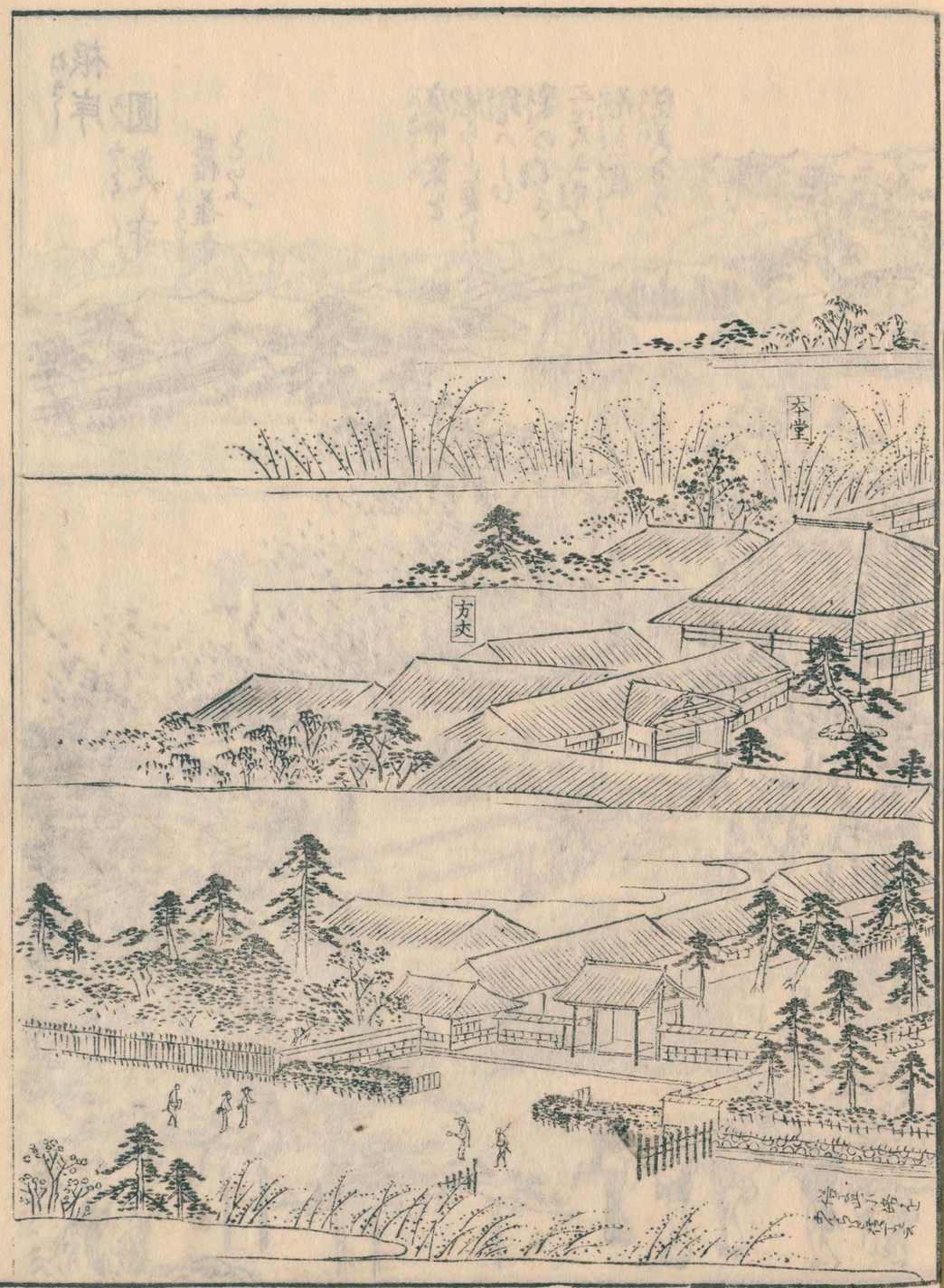
寶鏡山圓光寺　根岸の里にあり渋家の禪林なり釋迦如来を

本尊とし當寺庭中小紫藤ありて花の頃は一奇観なり故に俗

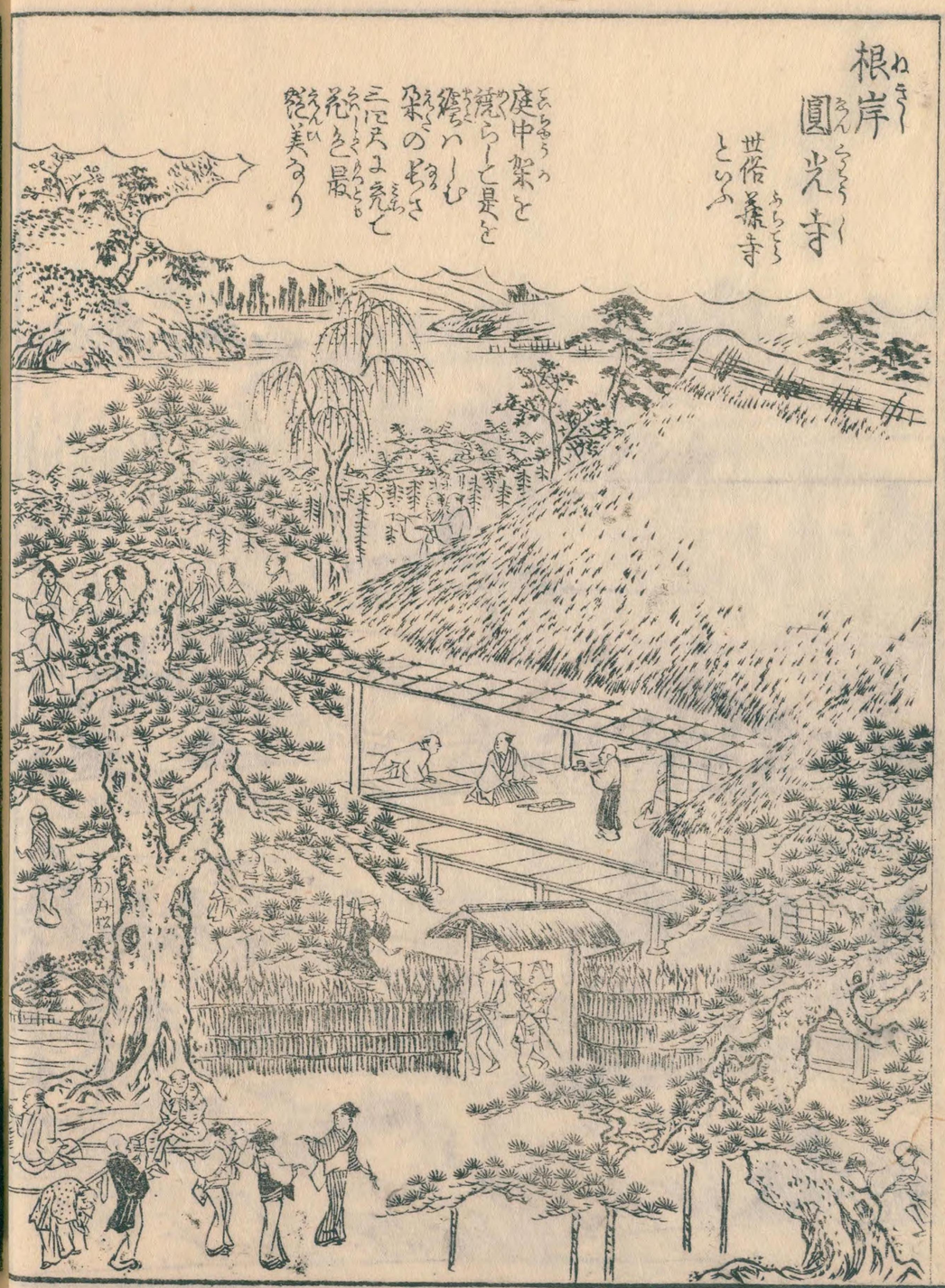
間あれば藤寺と稱せり堂前に鏡の松と唱へる名樹あり

鎮守の辯財天は弘法大師の作なりとなん

小野照崎明神社



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

時雨岡　同所庚申塚とゝるより三四丁艮の方小川より僧ゝあり一株の古松のもとに不動尊の草堂あり土人此松を御行の松と号来由いかゝしらず省畧也　一小時雨の松もよし

田園雜記　是この岡といふる所にて松原のありかたしかけよやとそ

霜の後あらはれかゝり村雨をいそぎの岡の松もうひれ〳〵　道真准后

按に岡の岡といふる東叡山の旧名なり此地も東叡山より連綿たれい田園雜記に出るところの和歌の意を取て後世好事の人の号けしなるへし

東陽山正燈寺　龍泉寺町にあり妙心寺派の禪刹にて承應三年に愚堂和尚草創也　和尚は大円宝鑑國師と謚号を天性明敏にして大に禪偈の造傳を敷起せ宝鑑國師の語録にはまひらかなり

の後園楓樹多〳〵　甚先山城高雄山の楓樹の苗を裁と云　晩秋の頃は詞人吟客ゝ群遊し其紅艶を賞也

真覚山西光寺　義輪新町にあり俗に土宗にて長和元年の草創なり本尊は阿弥陀如来は恵心僧都の作冥山は空蓮社賢誉上人たり

千束郷　龍泉寺町の辺今僅の地をいふ　一に篠堤と字也　菊岡沾涼の説に此地を佐く律見の里とも号くとあるは誤なりこの境内

義観あり千束稲荷と称也

或人云往古は上野とゝなれて俄草天王町の辺なりしを俄草に移し年の撞の鐘は武州豊島郡の東のゝ金龍山浅草寺にあり又同境内に西宮稲荷と称するあり里老傳へて是を上る東稲荷と号くるとも云小田原の条に古文書に東の内にて佐竹三戸石濱家の地を左同所六郎同石濱勘解由の地を右同大膳亮同金松の地を飯倉彌四郎同近藤弥七郎同朝倉分の地を江戸番匠等領とゝなりたりしを其地の廣大なるをもて

本戸三河守源孝範茅宅舊跡　傳云今三河嶋と称する地に三河守居住の舊跡なる故に此号ありしと　或云此地に細呂三河守とゝなる人の

孝範家集云　むさしの国とゝなりの那に入れ初めてこゝに住そめしより

国をるまゝに近れあるに故人のゝりて住りし夜ふけにめさまして

ゝ〳〵はるゝに夜ふけにめさまして

ゝるのとなれを国れ〳〵と申ふやとあるに

暁のふれるひするあ国のゝのあひゝとゝふを志ゝと学らん

返し

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

時雨の岡不動堂

田國雜記

霜の後
あらはれにけり
時雨をも
見ひの岡の
松もうひ
道真淮后

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

亭正燈寺の門楓

庭中楓樹最
はなはだくしく
晩秋の紅錦ハ
海晏寺の園林
よりも勝る色あく
實に一時の
奇観
たり

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

斬近くちろ五ゐゐと宿とんく待て夜氏のあひよともさけ

梅花無盡藏云　木戸公号羅鈎翁保和歌之正脉
余在洛而聳厥聲譽久之矣今也共寓武野之佳
境隅田之上流往還無虚月豈非天之至幸乎昨
賜詠歌三篇可謂暗投也聊奉攀末篇之韵脚云
二十六日（文明十七年乙丑十月二十六日也）　雪月寧非老年伴　一吟聊答數篇韵
隅田春色浪如花　鳥若知都我細問

按ずるに孝範家の事は武蔵國豊嶋郡の郡誌に入れり所に住せりるあらんと芦
なるべし云云又梅花子羅鈎翁と号し共に武蔵の
住境隅田の上流に寓せりと云へり今墨堤の間蹤ずるに似たり

本戸孝範は従五位下に叙し前三河守と云又羅鈎翁と号す今川
了俊の一族なり古田道潅東常縁及び正徹宗祇公敬万里拾
と同時世の人なり藻倉大草紙に孝範は冷泉中納言持為卿の
門弟なり兄弟の哥人なりとあり同書に長禄元年愛東の乱に
付て京都将軍家の舎弟左馬頭政賢愛東将軍の宣旨を蒙り
下向あるとて条々の供奉の人の中に此孝範の名あり

藻倉大草紙に長禄元年愛東の乱に記せり
藻倉大草紙に永徳三年氏憑小山義政退治の為発向とある条々に先ずの大将の中に本戸孝範盛
範季と云名を挙く同書永徳二年三年憲基の譜に孝範豆國玉清水まで対兎の人の中に
本戸孝盛憑範と云名を住せり何れも其の氏族の人なるべしれども系譜を考へに

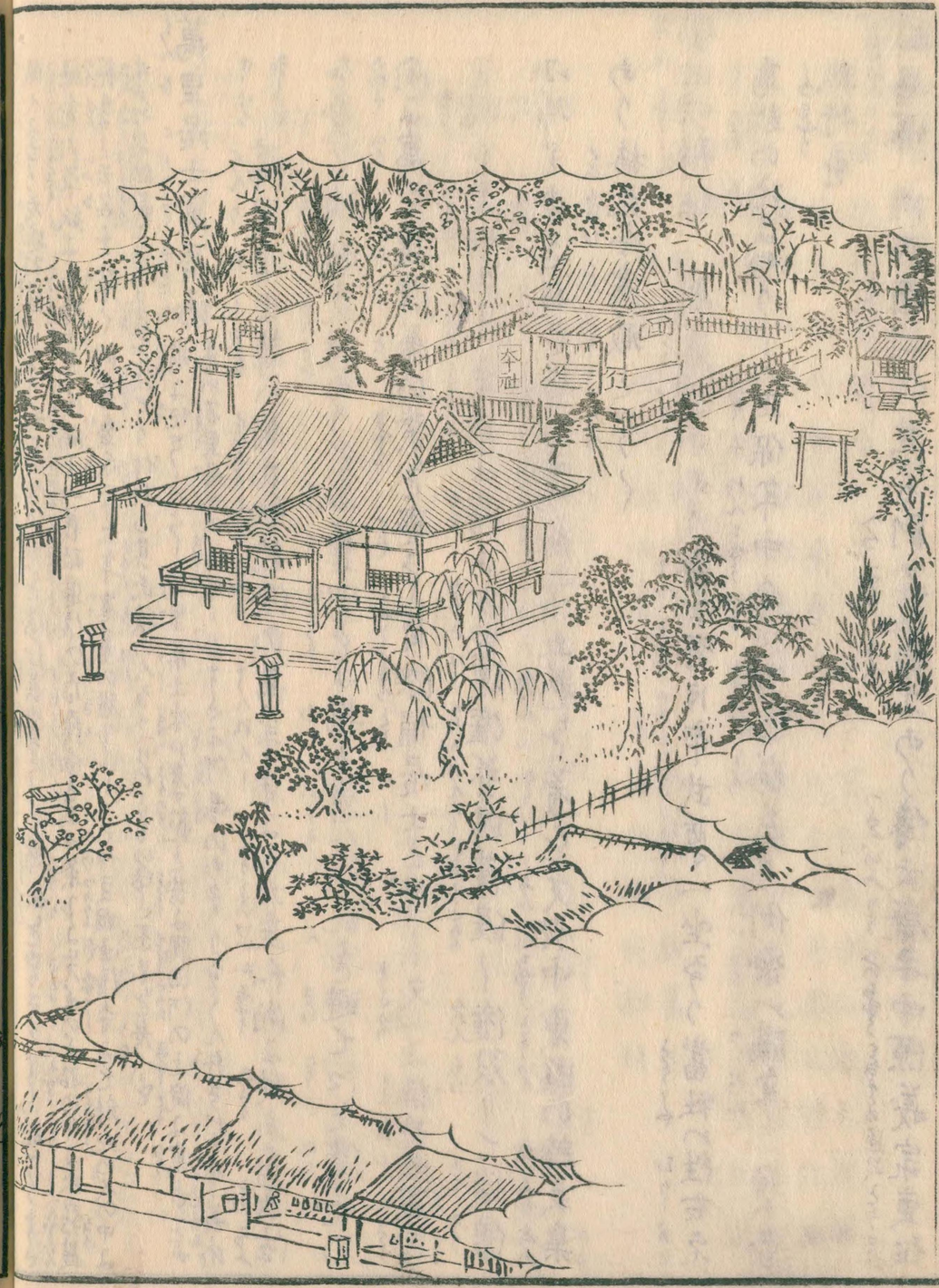
萬里居士寓居地　前に記せし萬里居士本戸孝範と共に隅田川の上流に寓せしと
其の萬里居士の住せしもまた三河鳥のあるべきなれども然されど今其地
萬里居士諱は端九初花洛の萬年寺に入大主和尚に従ふて其法
を受く禅機文材ありて名誉四方に揚る應仁の乱を避て江戸に尾の
間に寓せ後浮屠の業を廃て自然桶屋と自称し又一に梅花無盡蔵
と称し文明の末東武に遊び古田道潅養遇甚厚し潅歿して後濃
州に帰て老を投じ曾て天下向二十五卷を著て文明中東遊の詩文集
あり梅花無盡蔵と号く

熟田明神社

新鳥越にあり祭る所日本武尊一坐なり當社は往古え
鳥越の地にあり正保年中今の所に移せり例祭は隔年六月十日
執行せり

駿馬塚

同所南側にあり其の中にあり傳云康平中源義家東征



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

の時老たる和の青海原といふる殺生偶病して死に臨む大己貴命
傷みて枯骨を彈路の傍に埋めたまふ其後里民小祠を設け
建てゝ又近き頃其地のあらはれ出の明徳を以て歳のたび顕さん
ことを欲して塚の側に石碑を建て祠に其塚の東の方に迁す
飛鳥明神社　小塚原にあり此地の産土神なり立人混して義輪の
天王と称す　列聖の尊儀院宮未だ荊石山神籍未だ号す
祭神大己貴命　事代主命
日本紀古語拾遺等に大己貴命の御子なりと云
素盞嗚命の御子なりとあり
二座なり　社傳に往古延暦年中比叡の黒弥師東國化度の砌此地に
至る小小篠の茂りたる一堆の小塚あり　其塚より夜毎に
瑞光を現し白衣を着したる二人の翁判官生ける石の上に降臨あり
と黒衣なりと同く我が素盞嗚命の和魂大己貴命なりと　天王と称
又一人の翁同く我が事代主命なりと　牛頭天王は毎年六月二日より
仰ぎ清浄の地を撰むと此神祇一社に奉すと　日九日まで住大橋の南岸に

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

例よ[illegible]器を設け[illegible]祭呪[illegible]すなる神幸あり[illegible]この祭礼の權輿い天文十年辛丑六月二日岐阜川へ神輿一基流れうなる[illegible]後い此日をもつて祭日[illegible]といふ其神輿を夜揚し[illegible]今祭存と又猿和の[illegible]根と昔より彼地より生じ[illegible]る茅草を用ゆると同例[illegible]を花鳥明神の祭礼い毎年九月十九日より始めと[illegible]工祢老翁より化し[illegible]この石上了[illegible]考[illegible]上古の荒墓み[illegible]らんい

豊徳山誓願寺　恵心院と号を花鳥明神の北にあり浄土宗にて

本尊は阿弥陀如来を安置し基い恵心僧都の[illegible]寺傳曰僧都顯密の二教を究め[illegible]諸宗を渡[illegible]遂に弥陀の本願に帰入し往生要集等を著して大に自他を化ち[illegible]その頃僧都上京の慶祐法師に語りて曰く念佛の教いまく東国に遊化し[illegible]を汝行て弘法まへしとのり仍慶祐法師命を受東国に遊化し此地に来り當寺を建立を[illegible]寺法の恵心院に比して當寺を恵心院と号せ中古頽破ちを増上る十八世了蓮社定誉上人隨彼大和尚中興ち[illegible]塩尻といふる書に恵心僧都の冊[illegible]戒の文をとりさち学仏の徒の教[illegible]ふ[illegible]記を其文に云く

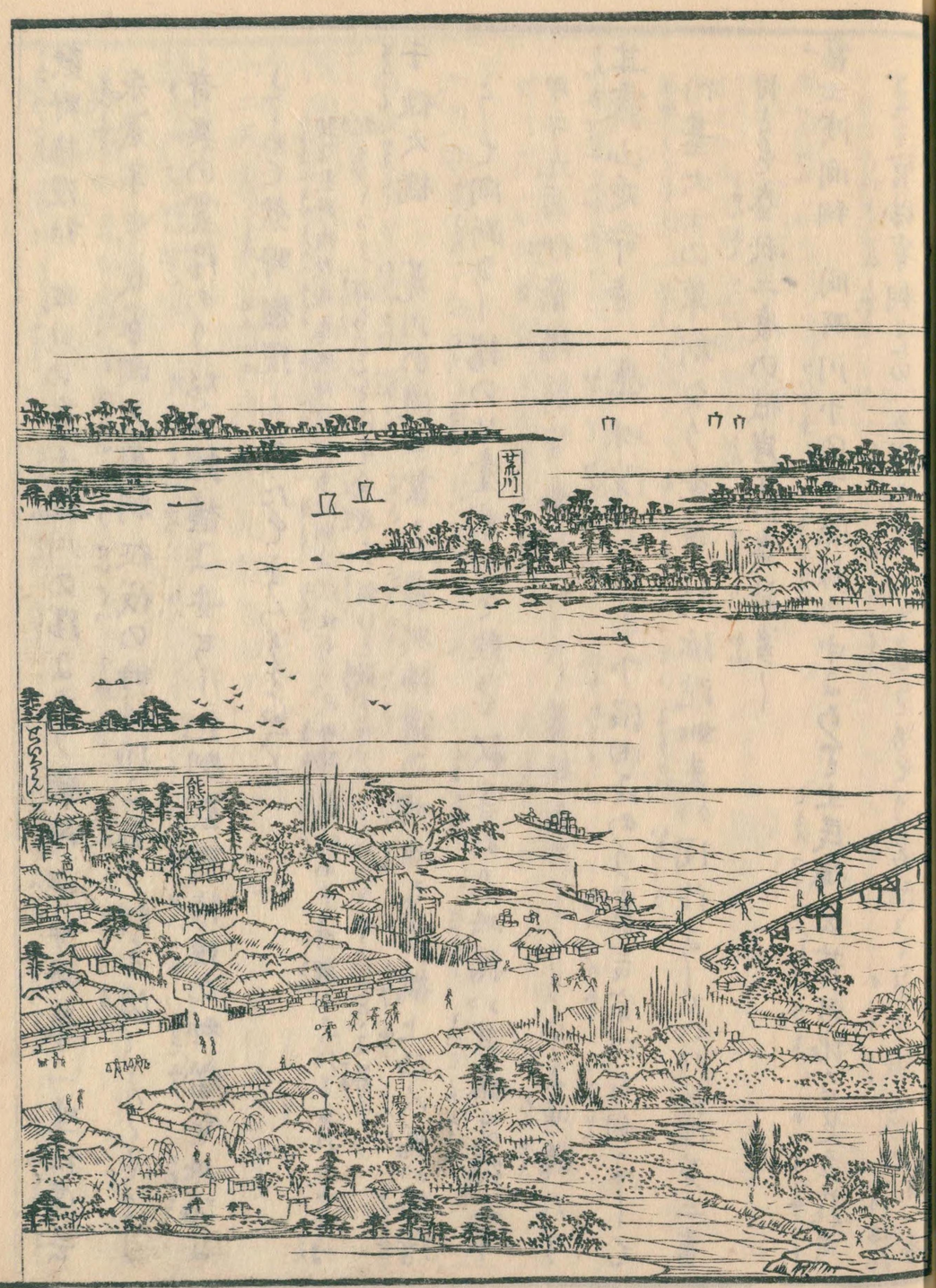
恵心僧都勅に依て奈内し称讃浄土経を侍講申されれい感感のあちり本尊をうひ御衣を賜りしいの右御[illegible]西[illegible]の方へ御衣と[illegible]ん[illegible]に[illegible]見を栄とち[illegible]

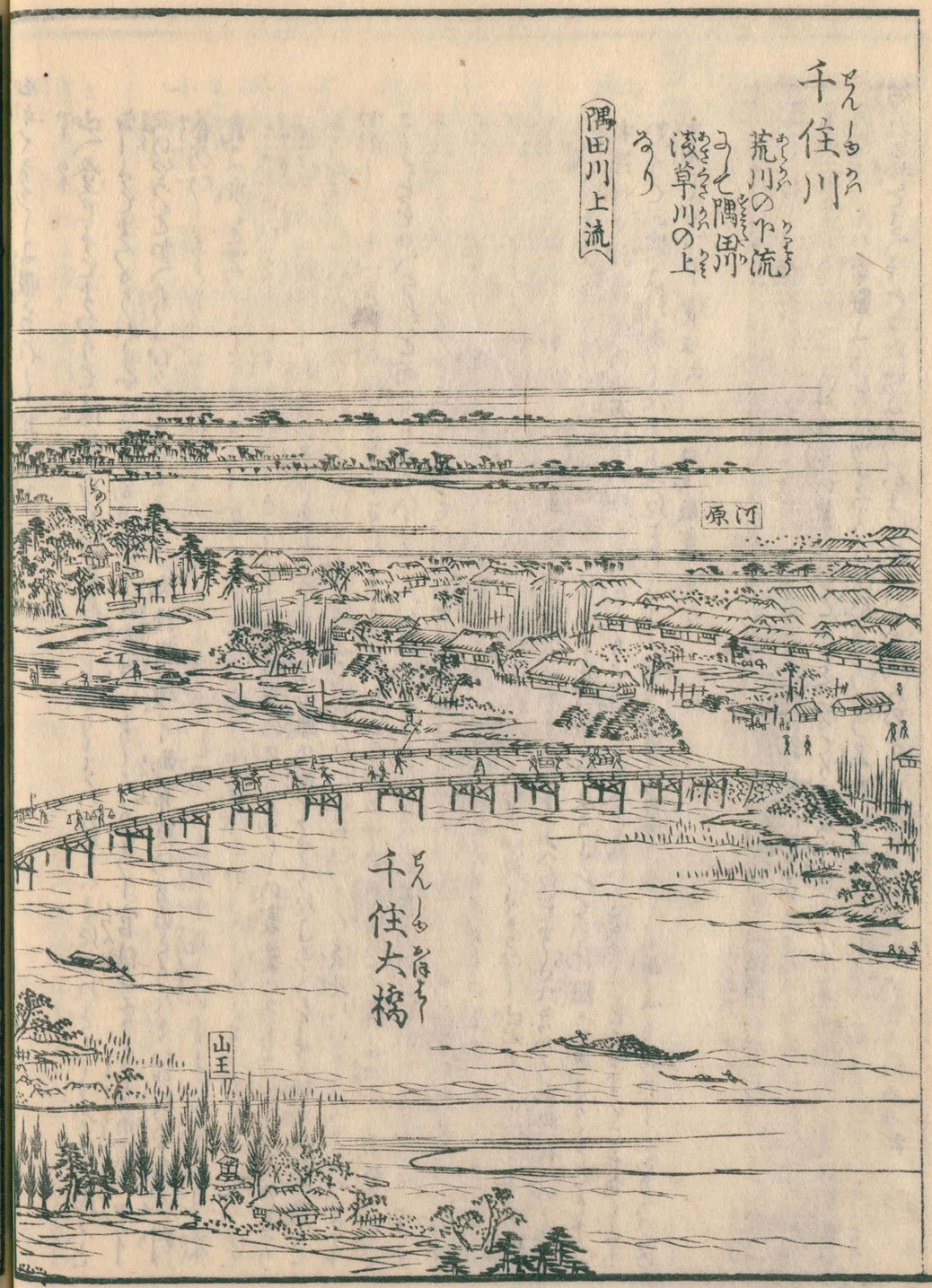
山へ登[illegible]ちて後いかけてもられてもうさいひをこ[illegible]れとも[illegible]道人と[illegible]官位よりも[illegible]青甲紫甲て衣のいろをあへ君よむひ[illegible]御経講讀[illegible]御布施のものをたちひ[illegible]利養のひ[illegible]食よ所を安[illegible]玉宮の[illegible]官位階の品[illegible]の袈裟ころもよりて[illegible]名僧の為に説法し利難の為の御布施[illegible]輪回のあん[illegible]離の御[illegible]ありたるあ[illegible]ん[illegible]の佛教よ[illegible]れし[illegible]四の名利よろ[illegible]さ[illegible]の愚[illegible]ち[illegible]後世ちとりたまふへ[illegible]ちくとをゆくられを面目とありひ[illegible]の中の愚[illegible]ち[illegible]義の世よ[illegible]されたる人[illegible]名を[illegible]佛の御弟子と名をあけさをたまへり佛法を[illegible]さる賢人さく首陽山よりとりて王命をいのひち[illegible]ちとりやいんや判髪染衣の[illegible]捨て[illegible]祭さのこ勅定よ[illegible]男女雑居の所へ出さたまふへ[illegible]の御衣いのり[illegible]如法如説の[illegible]称讃浄土経講讀の[illegible]布施の御衣此尼とり[illegible]布施よりうれ[illegible]地獄よ焦さるこ[illegible]ちて行ともへ[illegible]ひや後世[illegible]ちとうさ[illegible]法師よ[illegible]へ[illegible]候云云

以上取意畧文

嗚呼貧[illegible]の老婆あ[illegible]を僧級も後世を厳[illegible]よ故浄の念あ[illegible]と往生要集を速[illegible]自他を利益[illegible]の僧法師權門[illegible]よ[illegible]ち[illegible]面よ行[illegible]ありあんや男よ悪魔の[illegible]の尼の筆のあ[illegible]を[illegible]の人[illegible]玉毒のこ[illegible]後人の[illegible]へ[illegible]

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

熊野権現社　同北の方千住川の端よりあり祭神伊弉冊尊一座社傳云
永禄年中義家朝臣奥州征伐の時此地より渡り河を渡らんとせしに
奇異の霊瑞あり故に鎧櫃に安置し紀州熊野権現の神幣を此地に
とゞめて熊野権現と称たてまつるとあり
按に熊野権現鳥明神イかれも紀州に落座あり又此地に両社あるも呼称あるべしとあれども今伝
記に詳なるを深と余疑を儆しと欲とも考ひ得て書に
千住大橋　荒川の流に架せる奥州海道の喉候なり　橋上の人馬い絡繹
として間断なく橋の北壹貳町を経て釈金舎あり此橋い其始文禄二年
甲午九月伊奈備前守奉行として普請ありしより今に連綿たり
其露山延命寺　應味院と号せり下沼田に真言宗の古刹にして
行基大士の草創なり本尊阿弥陀如来ハ同作にして六阿弥陀第二番
目にして春秋二度の彼岸に参詣多し
富士浅間祠　同所川下の方深林の中にあり土民傳云昔此地に足立荘司
なる宮城宰相とゆへる者あり一女をもうけ名附て足立姫といふ六阿弥陀第一番

第四番西縁起にあり豊島左衛門清光の妻ともいふ二番目縁起にあり沼田荘司の女ともいふ父母隣縣の豊
三番目五番目にもとゆへり六番目縁起にあり足立遠元二位宰相藤原正成の女ともあり六阿弥陀第一番縁起に足立遠元
嶋左衛門尉なる者のもとへ嫁せしめんとせしに
縁起にあり沼田中補のもとへ送るとあり三番目縁起
余木の弥陀等の縁起上に同
外祀る故に是に隨ひて父母強く婚姻を整へしに
患へて竟に荒川に入て死せり　又沼田川とも云ふ住川の侍女も又ともに身を投て死
せり仍荘司悲歎に絶へて又村人彼女子等の行跡のたくみなるを称し其日
六月朔日のなれいとて其霊を富士浅間と称して一社に奉すといふ
されども其説未詳
浅間淵　同所の河淵をさして云ふ足立姫溺死の所なりといふ
十二天祠　足立姫の侍女の死骸を収めて十二天と称せり
餘木阿弥陀如来　宮城村龍燈山性蔵寺に安置せり
弥陀如来の像を彫刻あり其餘材を以て昌平橋造営の節草堂の
中に安置せしを遠に後明暦の頃正誉龍呑和尚改て一宇の梵刹とし

光茶銚

千住の驛たるれ
道の左側にあり
お入い者老茶
屋とも呼めり

むり〜此店の茶
銚の光澤の殊
よ務たりし我
重元侯感賞よ
あつかりしより
此茶銚竟に
名物となり
其名さへ
世よ
光る
ようぬ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

春秋二度の彼岸
まゐ六阿弥陀廻とそ
日ゆけの麗あるよ
催され都やの貴賤
老たる若きも打群ゐく
朝とく宅居を出ると
ひとも行程きとれい
遅くたる夢の日も
長ゆくと秋ひとときら
暮ゆきう
ゆりつるへ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

と此地に住しあり則此寺の冠絶たる當寺に足る姥の墳墓と称するものあれども詳ならず

五智山總持寺　西新井村にあり真言宗にして通照院と号し弘法大師の草創にして本尊弘法大師の霊像も同作なる霊験著く毎月廿一日に開帳あり〻〻参詣頗多し

或人云尚寺弘法大師の霊像にあらず日蓮宗にて此像本尊の尚寺に迁座すと云

丁伽井　本堂の左の傍にあり則弘法大師の加持水なり洗目眼薬に用ゆ

其霊験あり此井に依て此地を西新井と称せしなり

八幡宮　六月村にあり別當を宝天寺と号し傳云八幡太郎義家朝臣奥州征伐の時此國の野武士共も道を遮る其時六月宝天のうりをれば味方の勢勇〻く戰ひしとなる気色もなかりしよし義家朝臣心中に鎌倉八幡宮を祈念ありしに不思議に大陽繞る如く光を背に受おれい敵の野武士亦日小むかひの故に眼くらみ大に敗北し此に依て此地に八幡宮を勧請ありしと此故に村を六月といひ寺号を宝天と称し又幡正山と號せしとなり

白雞塚　伊奥村田の中にあり傳云往古八幡太郎義家朝臣奥州征伐の時此地に白雞を建凱歌を唱へしより此名ありしと近頃迄此塚上に小祠あり其傍へ立寄るものあれば崇あり故社荒廃せしをもひろめしとも其傍に再建もせざりしとく今塚のみを存せり

今も此塚の上に登るものを焚き此辺の田面を白雞耕地と称し又兎塚と称するものの五箇所あり兎首實検あり〻後其首を埋めしなり

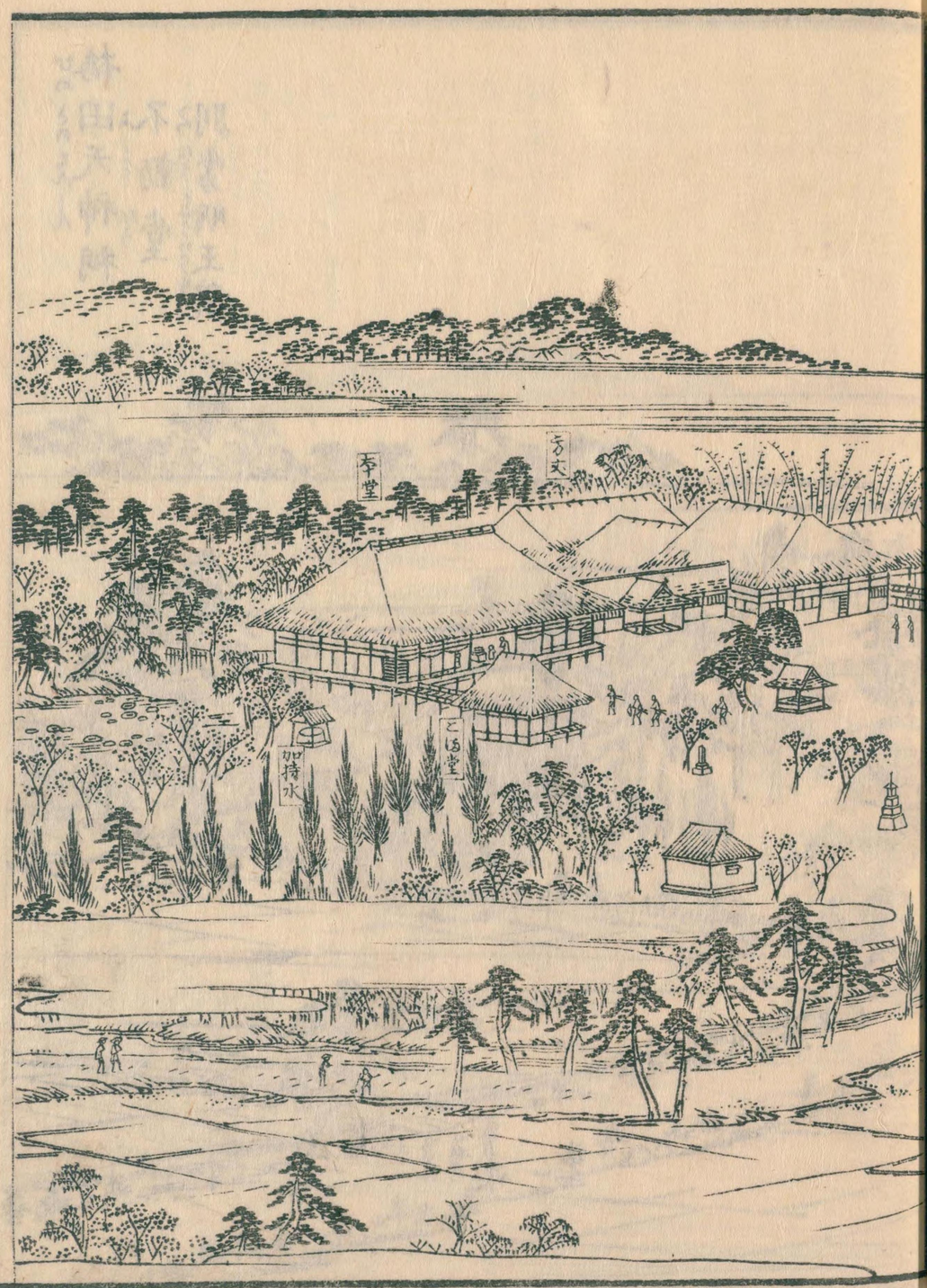
萬徳山明王院　梅林寺と号し梅田村にあり新義の真言宗にして本尊は地蔵菩薩を安置し寺記云當院冠基志右三郎先生義廣八幡太郎義家の孫六條判官為義の三男なり

給常陸國伊豆に住し後同國志筑村にあり故に志筑を以て氏号とし八坂本平家物語志筑に作る

初武別榎戸に一院を創基し祈願所とし當院見なり昔は日所榎戸にあり是より先治承の頃頼朝初て義兵を起すとの時義廣自立の志あるを頼朝に隨ひて初て小山小四郎朝政を為に敗られる其後同左馬之義純の孫義廣三代義純より外右の為を廓と号し往右義純の茅宅の地なりしとい

其裔常陸介久廣義純の三代の孫なり當院の傍に始て天満宮を勧請し鎮守とし又神号に仍姓を梅田と改め小右郎と号し又遠江に永正年間冥東大に乱る同右郎左衛門久義小右郎久廣より十六代の孫同帯刀久光の子なり後左馬介と号し是を

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



西新井大師堂

毎月廿一日
冠者祭

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

厨ひ丹別嶋村城より移り住し又同國峯山城より移るといへども遂に敵の為に生害と長ゑ久頼をゝひ久支續て峯山に住り其後國民當院に乱入し遂に破壊をなすしを慶長の頃頼專坊舎利久義の今の地に迁して寺院を再興し真知法印を以て中興開山とす又寛永二十年の春大樹御放鷹のさきり立よりこれを寺領等を附せらる

不動堂 本堂右の方にあり本尊不動明王は弘法大師の作にして鐵上人根来傳法院草創の頃不思議の霊感あるに仍て後に當寺の安置とす

天満宮祠 不動堂の後の方小き丘の上にあり古松の下にあり来由は寺記の中につまびらかなり

正一位鷲大明神社 花赤村にあり此地の産土神とす祭神詳ならず本地を釋迦如来にして鷲に乗る鮮相にして別當は真言宗にして正覚院と号す

毎年十一月酉日に以て祭日とす縁起同本地釈迦牟尼如来は新四維三郎義光崇敬の霊像にして天喜の昔奥州安倍貞任叛逆を企るの時本尊の示現によりて其軍勝利あり由を記すとも其説詳ならず

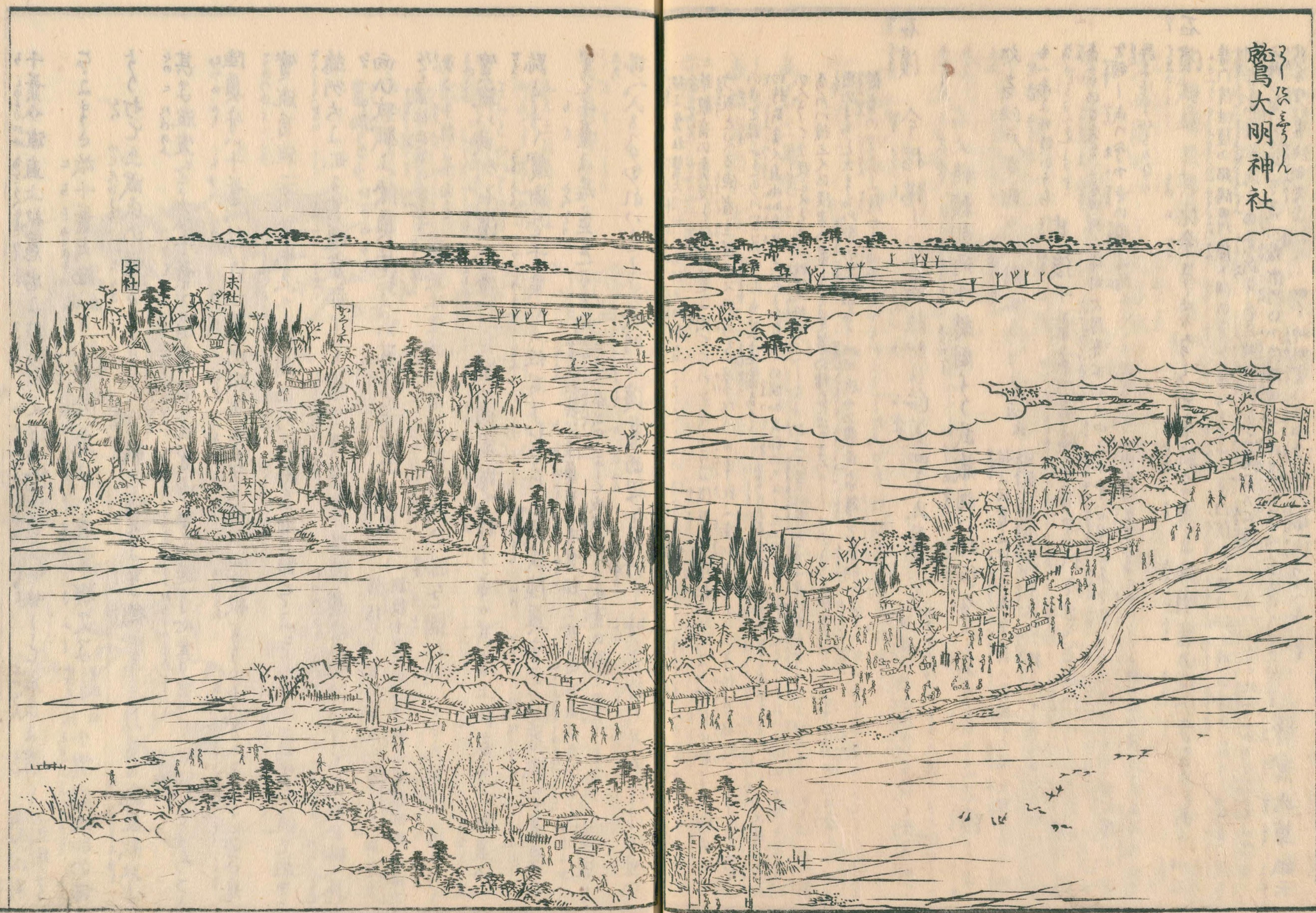
按に當社鷲大明神は土師大明神なるべし仁とは假字の誤り歟なり當社を立俗説草観音の奥院と称す是に因てこれを考るに浅草寺縁起のうちに土師臣中知なる人檜前濱成竹城といふる漁者主従三人の者を乗せ出る日本紀に蚕仁天皇三十二年陪見宿禰なる者に土師臣の姓を賜ふとあれども其中知も其遠裔なるべし陪見者は天穂日命の孫なり記に天穂日命又續日本紀曰検前舎人直由加麻呂といふるものむさの國加美郡の人にして土師姓と称す因て思ふに出雲臣武蔵國造土師の連等も遠祖なるべし此濱成竹城も武蔵國の人にして主従三人ともに姓は土師なるべし古事記に天菩比命の子に建比良鳥命といふる神あり出雲の土師姓の祖なれば彼三人の漁者の輩なるべし是等の説当社に毎年十月酉の日祭あり世俗西のまちと云まちの祭の異語なり此日近辺の農民家鶏を奉納する不の赤鶏をならべ浅草観音の堂あるに殺らを同例とせられ又ある処は後人の考へ東鑑に頼朝隅田川を渡て武蔵國に入るべし右大将頼朝御下總國より武蔵國へ打越のことあるを考へに石濱と申処を江戸右郎り知行不なりと云

按に同書に江戸右郎重長は八箇國の大福長者とあり重長は自山庄司重忠の一族にして其頃豊嶋郡江戸の地も一帯に所領のうち其後千葉家の所領となること代々是を知行せり永禄二年条氏の右京亮に吉田新六郎同大膳亮不領の中に千束石濱の今津を領し或は今の寺の領にも附せらる記に今の寺は總泉寺のこと末内宮内少輔石濱の今津詩に此年ひらかるるなり

石濱城址 其地今さゝらるゝと事跡合考に神明宮の北の方にありとあり

按に亀戸普門院法蓮の紹隅田川蓮の淵のことを挙たる文中に普門院古い隅田河之勝の傳中にあり云云普門院古い則に系自愈創立の梵刹にして之勝の北にも又小菓氏の不領たりしるべし小田系北条氏の古文書に詳なり之勝と唱へる地は荒川綾瀬川の下流隅田川に落合川股の不領なり名はくくしく移る時は事跡合考に記せり如く神明宮の北の方その地址なるべきを

鎌倉大草紙云



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

千葉介亂直上杖憲忠を誅ころ又子兄弟共に一味して成氏を背く（成氏の攻戰た馬頭ゑ）
ちゝまもる故千葉大助（満亂）ろ二男陸奥守入道常輝又ゑ其ゑ孫介（孝亂と云）ゑ總國馬加の城
より打て出成氏の味方となりて合戰と竟ゑ享德四年三月廿日亂直敗北し
其ゑ亂宜をゝひ千葉入道常瑞舍弟中務入道了心等悉く切腹とゝろ
陸奥守ハ千葉へ移り千葉の跡を繼ぐゑ上杖うゝ中務入道了心の子息
實亂自亂二人を取立て總國市川の城ゑ籠りとゝをひて千葉家二流と成
總列大ゑ亂る其頃京都ゑて東下野守常縁陸奥守退治とゝて馬加の城へ発
向ひ攻戰ゑ陸奥守ゆゑいすゝて千葉へ引退く（常縁ハ千葉介常亂の六男東六郎を夫亂頼十世の孫ゑり時ゑ美濃國郡上の城主）
京都勾軍の命を受て下總ゑ向ふ　康正二年の正月成氏市川の城を圍む同く十九日落城し
實亂ハ武列石濱へ落行自亂ハ同赤塚へ移る其後上杖家より亂直の一
跡ゑて實亂を千葉介ゑ任ずゝむされと成氏陸奥守の子孝亂を長員あ
ゑて千葉ゑ居立ゆる間（孝亂ハ其ゑ陸奥守入道常輝と共ゑ故亂直兄弟を亡し成氏へ奉ゑの人すて故成氏より千葉の跡を賜ふて）　實亂を
城へ入るゆゑれゝとして武列石濱舊西辺を知行し時を待て居たゝゝ世の

鷲大明神祭

毎年十月酉の日ゑ行ゆす世ゑゆの近々の農民赤鶏を獻を祭終るの後悉く淺草寺觀音の堂前より破ゆを舊例とす

中を述懐し濃列よ宗君と依て上杉家より實胤の跡を兄の自胤に賜りし葉や
よ住を是を武列の千葉と号を　以上康倉大草紙の意を採る
南朝紀傳云　丙子康正二年三月千葉乃家も成氏と上杉と相論よりて
二よりて惟胤と園城寺の某武列よ趣く　云云

梅　花無盡藏文明丙午隅田河詩註云　隅田在武藏
下總両國之間路傍小塚有柳道灌公爲攻下總之
千葉搆長橋三條云云
同　書　便面題詩註云　八景或雪讃献千葉蓋上總
下總千葉所管也今寓武列者與上下總之千葉矛
看一門分爲二灌公故在其者
雪月碧湖煙雨後　漁歌鐘色送飛鴻
片帆千里賣花市　上下總皆君握中云云

蓋　説寓武之千葉惟種也
又案東古戰録小田原實記等の書よりみ葉大助満胤の庶子北總馬加の城主陸奥守康胤異母弟惟胤
と家督をあらそひ康胤打敗て總領を奪ひ惟胤宿老の田城寺左馬次郎惟胤をいさなひ江戸城
よりて太田道灌よ庇陰を頼られ道灌これを高恩よ感力あるをあられを石濱の砦をさつけて是を守
ら此其後惟胤自身より其子次郎胤利と上杉朝興よ仕へ南方の敵よ追れて江戸に
城を退去し後北条氏康の猛勢よ屈し石濱近辺の所領を安堵し一跡を胤宗よ讓りとりされと天正元年
癸酉十月右河の御所義氏下總宝菊の城を攻る頃胤宗討死を依て其後に石濱の千葉家ハ
男子なしよりて氏政の下知よて北条常陸次氏繁の三男を賴るよて彼女を書合せ次郎胤村と名乗
せ千葉の遺跡相續をなしむられともいまさ幼少なりれいそは内上所と云る者よ預られ上洛討死の後に其子
宮内少輔支配あり其頃の石濱領四千貫文なりしかとも人の後石濱を返し居なりへ

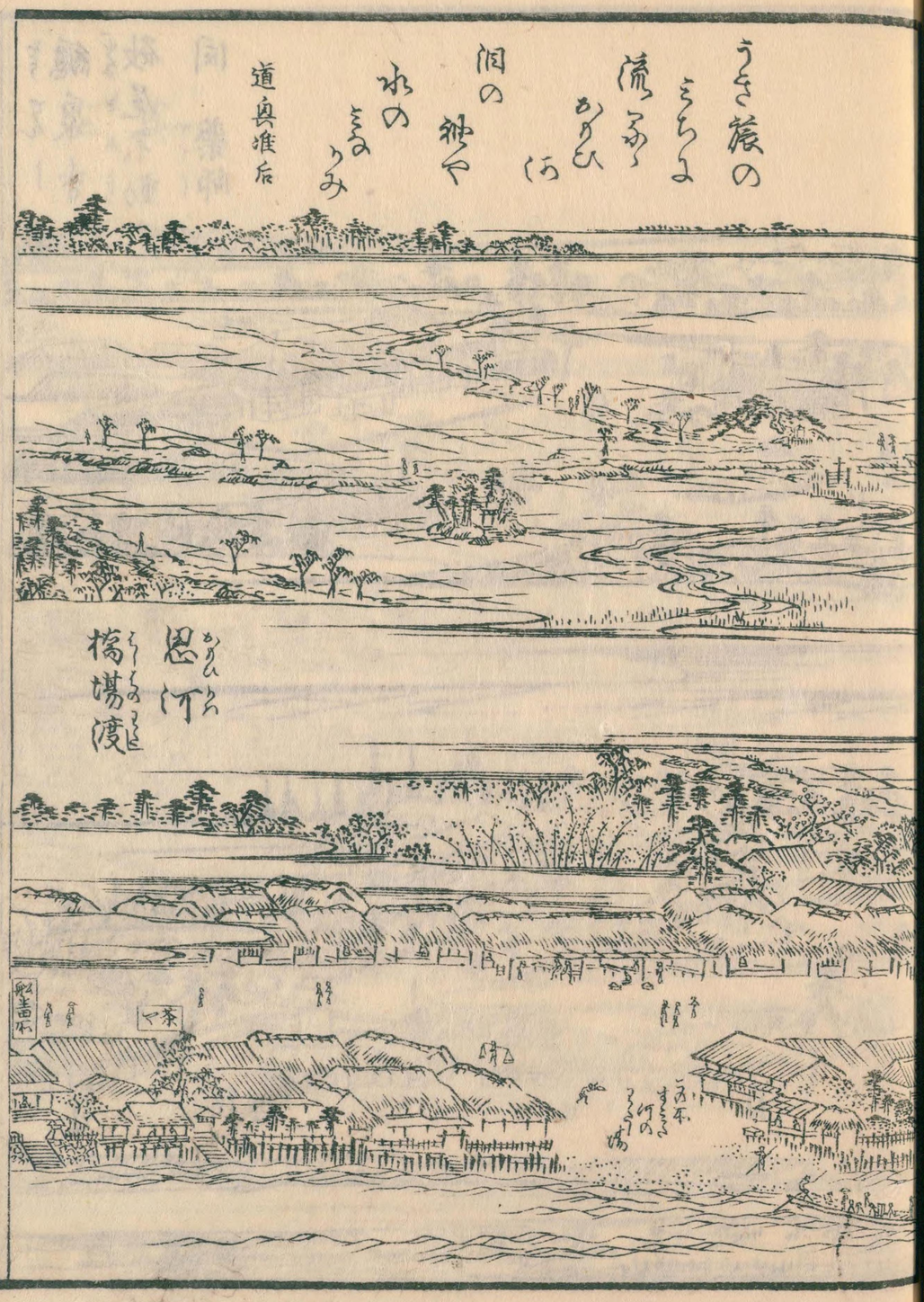
熟功あれとも本内ちかに花字服内義といへる者金人上洛
し者金の不足なれしを念よ思ひ被字服を拾ひ石濱の總領
なるうの由小田原へ申されさるめて千葉次郎の不行なるへ
按よるに陸奥守を藤倉大草紙よ常輝と号を大水満胤の二男なり又梅花無盡藏の註よ惟種とあるも胤を書誤れ
しと常輝と号を大水満胤の二男なり又梅花無盡藏の註よ惟種とあるも胤を書誤れ
を入一惟胤い實胤の孫なりて守胤のまるりもくて実胤より
再ひ戦爭よをよひしるん永禄二年小田原北条氏の右文書よ江戸赤城に籠すれしく彩倉小机の
上左子葛西の上平井ハ足立の閼伽井伊奥寺信内所々大夫宗達沼田保東曽之俣大宗達以上
云云又按よ此石濱の城い天正よ至千葉の一族絶たりし

橋場

今神明宮の辺より南の方今戸を限て橋場と称と舊名い石濱
なり　事跡合考よ石濱の義経記よ治承四年庚子九月十日東鑑よ同年十月二日
此今汲入と唱なりと云　頼朝を井隅田の両河を
渡らるとあるを井の力称川の　頼朝公隅田河を渡て武蔵國へ到れり
更級記なも出る

時二三日の雨よ洪水岸を浸し軍勢渡し兼たりもれい武衛江戸左郎
重長よ仰て浮橋を係しめしと重長あへて諾いと依て多茶次常胤葛西
兵衛清重　両人江戸左郎を助しと紀行所今井栗川あるうしまるうの
栗川あるうしまと詳なるを海人の釣舟を数多登せ江戸左郎が紀行所なるを
石濱よ折節西國船の着たりを数千艘集め二日の中ハ浮橋を組たりれい

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



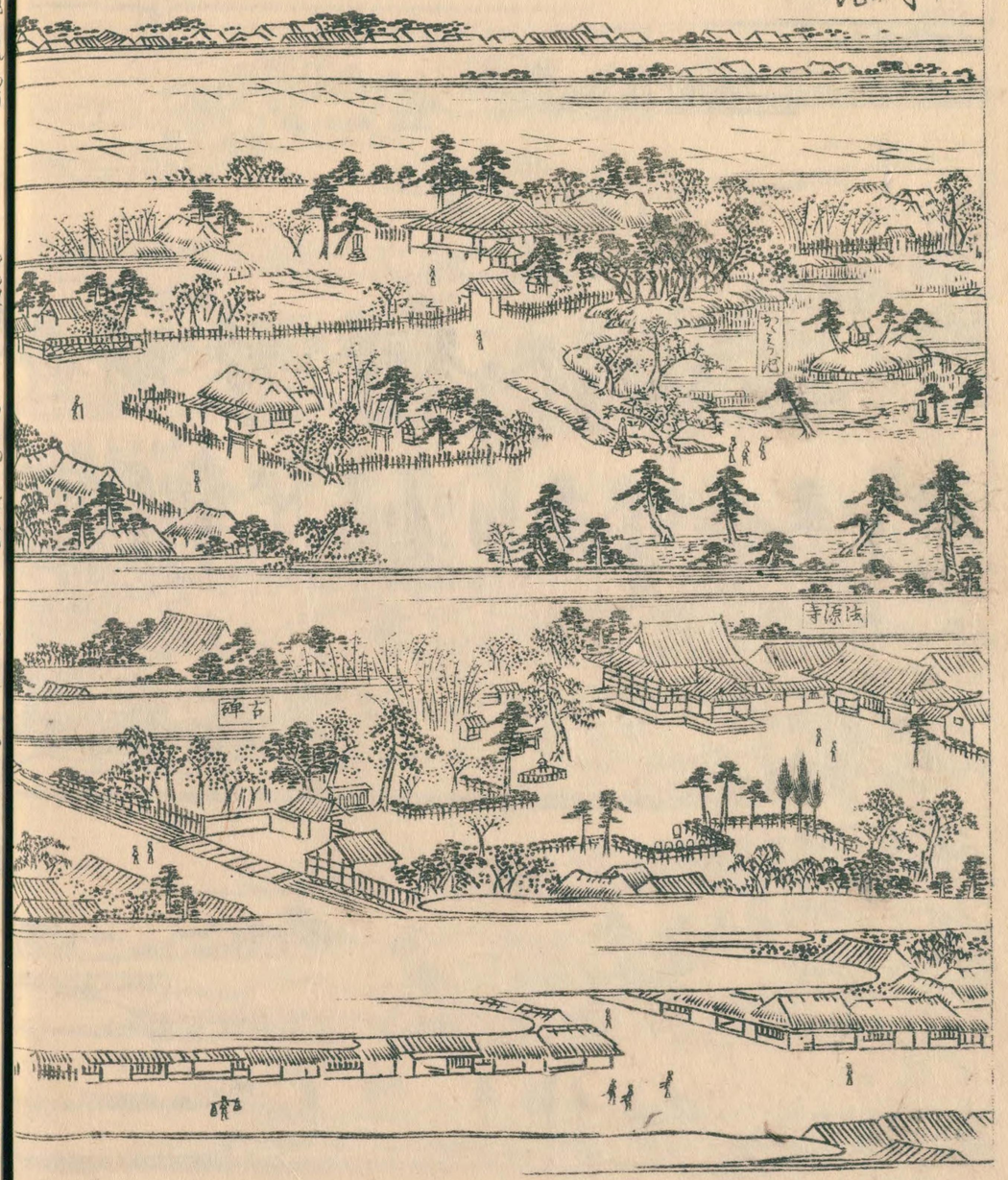
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

法源寺鏡ヶ池

其五



佐殿神社あるよりして仰られ古井隅田を打越て板橋に着ぬとあり 隅田河右海より流き

海村のうしろの義経記の文義なども見るべし

夫木抄

隅田河むかしはきりとを今とてはの身を浮橋のある世なりけれ 光俊

其註歌書よりて此年の康元元年鹿島社のまうでとて角田川の渡とられば彼ところ今の浮橋をわたりたりけれとあり又

梅花無盡蔵詩註云 隅田在武蔵下総両國之間路傍小塚有柳道灌公為攻下総千葉構長橋三条云云

按ずるに承平盡蔵記をよりて光俊鹿嶋記行等の書に載るものの仮初にまうけるの橋なるべし承平盡蔵記をよりて考に承記等其入道の書にも橋場の名なくして橋場の号を攻る頃道灌が總の諸家を攻る頃よりて發るなり又南向亭云く隅田川の渡場より一町くだりて川上よりしりの橋の古樋水底よりのこりて埋れ舟代のもきりよりさらにうるはしくかけられと其橋ひれの頃のものとも云伝て考るに八今のごとく埋れ一町くだりて川上神明宮の大門の通り其舊跡なるべきもまさに里老伝へいふ此地法源寺大門の通りをいひ今のごとく橋場より南の方隆船所のあたりに出るなり此橋場の用ひるのりとなるは隅田二本榎より橋を掛くるよりとれよりて考るに梅花盡蔵に所謂長橋三条を構ふとある意に協へるなり

朝日神明宮 橋場にあり 石濱神社 或人の説に此地に神明宮あるを或は上古伊勢濱と唱へしと云 或は橋場

神明とも号く祭神伊勢に同じく内外両皇大神宮式に載まる社傳に云

人皇四十五代聖武天皇の御宇神亀元年甲子九月十日鎮座と云云

牛頭天王社 本社の左の方にあり橋場の産守なり世に汲入の押合祭として神輿今戸橋をわたる氏子の輩ちらしく神輿早に出るに其神輿に

隅田川渡

名ゆ
あらし
いさ
こと
なん

都鳥

歌

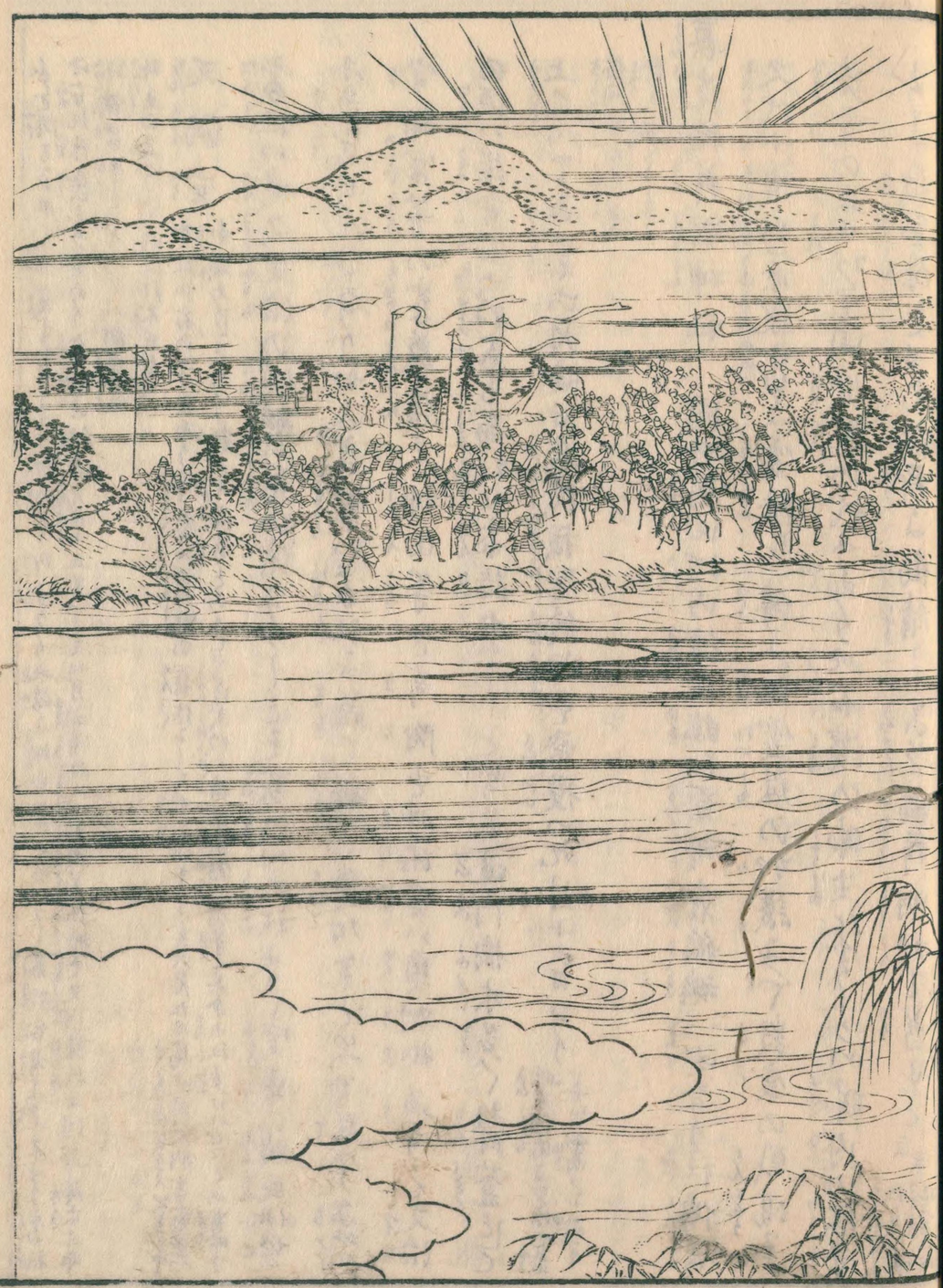
ひと
ゆ
ゆ
と

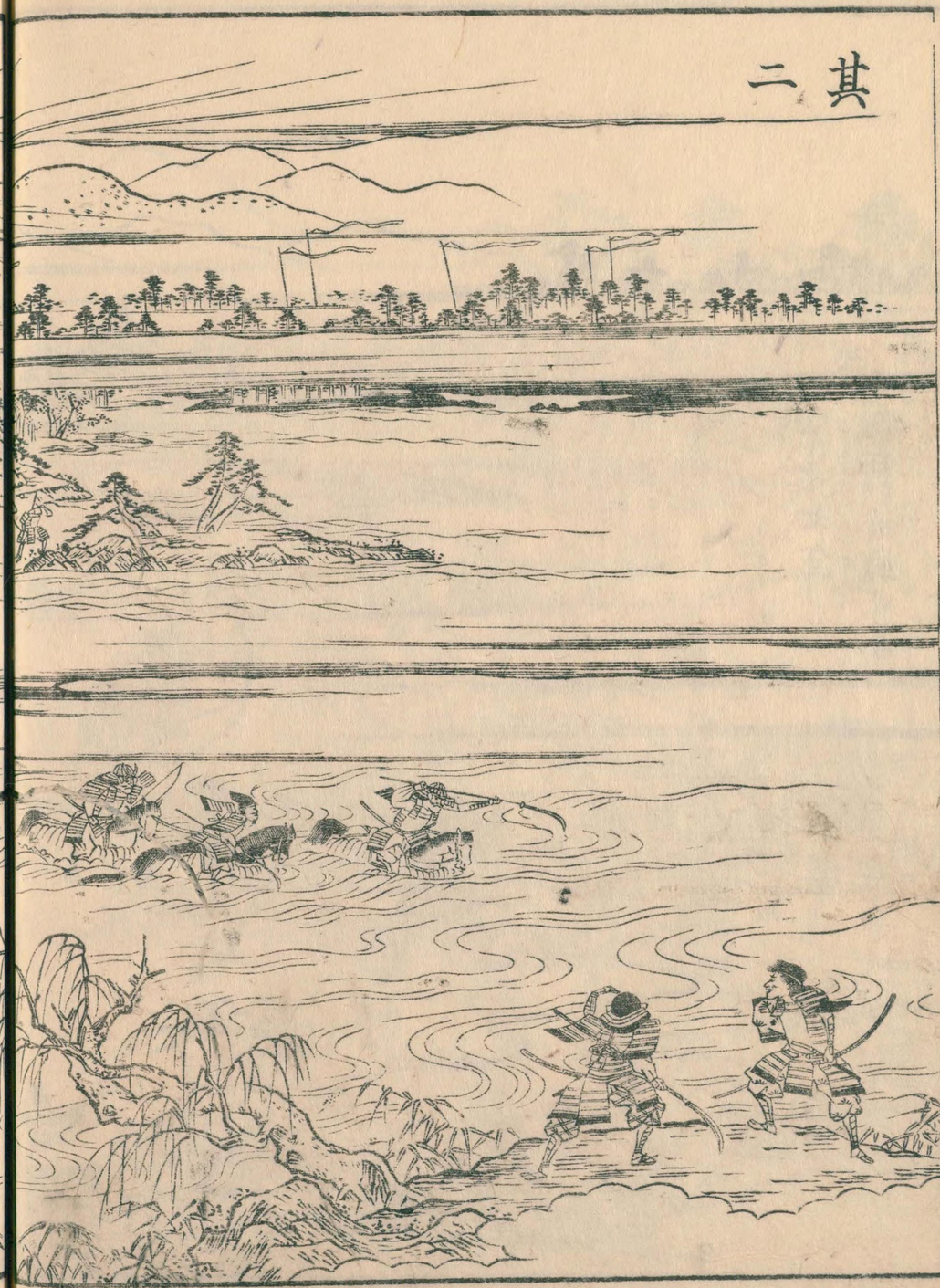
在原業平

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

正平七年
隅田河合戦之景

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]

田園雑記　井ゐ川よりいそりとよめる

うき舟の道ゆかるる思ひ川渡乃神やそのこるめみ　道真准后

隅田河渡　橋場より須田堤のかたへの方に渡るを今い橋場の渡と

唱へ　元禄年板の江戸鹿子に出る草紙よむらの渡い今のところより上るりと称のあるき

人を物語るるりとあるをむらい須田の渡とものひをるるや大木抄に経兼の詠あるを

次よもちるを

古今集　むさしの國とちりふさの郡とのあるふ所のすとのあるすゝきいのかとりよいくりく級のと

ちひしう夢はえられいたりく河のかとりよりまをめて思ひかれいかきりるく書くも書うり

かるれとありひいてるるあをるよりて書をくや舟よのれ月も暮ぬとのひられい母ふのりて

りさらひとをるよるる人物るひしくて都よりの人うくしものとさるありよ向き島のりと

あるとあるひ河のかとりよあそひけて京のかええぬ者るるりられみる人見まらをりくまる

見るる何者るそと向りれい是るむ都鳥といりるをきてしるる

名所　井ゐくいさゆとるむ都　名、京思の人をありやれしやと

音妻の道の記　角田河ちりときいて見よもくく今も船よ

のれとりみいのりく字のをちのやあるん

とれそこのあつまちをくとひとりすをこと行京の渡のり世京　長嘯

とりてたそれとそこのまむすをたりれひれおる島のあらぬ名もとそ　同

かくそこる道よあさくさの観音とそ四ゆとりそるをと

佛教とりとそ云云

夫木抄

夕霧小須田のりくりい見え秋くるも舟人とりの寄り世ゆり　経兼

石濱古戦場　橋場の北をへて石濱とのへるよ以くり　新安手筒ま向石先生石濱の教へあるとこそ

吉平記云正平七年壬辰閏二月　北朝の観応三年まと改元の年なり　故所田義貞の次男左兵

衛佐義興二男少将義宗後父に才左衛つ義治義兵を紀し其勢十萬

余騎よて武蔵國へ打越たりとそれよ依て将軍尊氏も鎌倉を進發し

敵を道くよ待て戦を決ちむと同十六日僅よ五百余騎よて武蔵國へ發

向あて追を小勢集る勢をくく八萬余騎なりくり同廿日武蔵路の

小手指原へ打て出新田足利の両勢二十萬騎入乱て大よ戦ひあるる足利方

の先陣急よ敗まて引退たりれい後陣をむの能らと方よ敗走を義宗

自諸軍を率て大よ呼て云天下の存よい朝敵なりり義ねるい父の讐なり

此戦よあるて尊氏の首をえとりい付の時をり期をくきくと呂二引両の

大旗の引よ付て小手差原より石濱近坂東道既よ四十六里を虎時り向

小追分たて此時ね軍い石濱を打渡虎口を通る　天正年記隅田川とあり　猶ね軍の兵

士殘を止て先途を支る間よりも既に西のかたよりて汀の渕瀬も見え
わらさんい義家を續てわさをうもあらと又後よりはくく味方もなるれいを
かゝぬのかれと牙をかむて本陣へ引歸さはあとあ　以上古本記の意を採る

砂尾不動院　搭場寺と号と渡場のかし南の方道よりを右よあり天台宗
ゆゑ淺草寺よ属ち　往古は法相宗なり　長寛癸未歳よりと宗風を改ゆ　寛亀四年癸丑良辨僧都
の上足寂昇上人當寺を冠基し本尊よ不動明王の像を安さ
縁起曰本尊不動明王は良辨僧都相別大山寺ふあるを頂彫刻あり
三鮓の一ゆて彼寺の本尊と同木同作なり僧都一時上足寂昇師ふ告
て云く三鮓のうち一鮓は此山よとゞめ一鮓はいとゞめ持念を殘る不の一鮓
は汝よ附属とへ　何方よそも有縁の地よ安さへしとゆり仍て僧都化寂
の後　宝亀四年歳八十三ゆて歳ち　寂昇上人上總の方へ郡く道の次適此地よ入り霊告を
得て有縁の地なるへをを志をそよ安へ則村老所人よ問へくひく草堂
を營て砂尾不動尊と号云砂尾藥師如来寺内よあて本尊を

惠心僧都の作なるて　蘭而寺茶毘よ云く或説よ往古砂尾神社の夫とりの人ありて
天台宗なる砂尾山不動院と云と云云られと當ち伝記よ彼ち夫のゆを載さまゆ通潅と戦ふと
諸書よえあゆ云を粉考へへ

妙亀山總泉寺　曹洞流の禪林ゆて江戸三箇寺の一員ゆて寛山霊叟
宗俊和尚と号と當寺い千葉家の番花院なるて　永禄二年小田原小条家の分限帳よ
載砂石使の舎下ゆとあるい尚ち
のゆを云
なるへ

千葉氏墓　境内卵塔のうちよあり長三尺ゆの青石よ梵字のを鐫めて年号法名ふ
昌徴大居士とあり寺僧云く守徴い弘治二年丁巳十月八日卒去とされと寺徴卒去の時世ところ
ゆひあるよ似ゆり又江戸恐慮るよ為砂常徴の墓碑ふい春伸院殿貞公居士同よ為砂貞徴の
墓碑ふい民公自記流とあるよ　記ちても
今不正を志ゆ牧他日考へるきゆ

宮津宮弥三郎入道墓　十一月廿一日其一ハ徳治二年丁未二月七日とあて
按よ當寺よ氏ばしある不の宮津宮弥三郎い頼綱入道實信坊なるへ又の号を蓮生と唱へ
承空上人の法を継て後善恵上人よ就て出家と云ゆ元年己未十一月京師よ寂し遺言よゆり實を師
の石塔の傍よ似るよう西山上人の代よ見えゆ其他い則京師西山三祖寺の東の脇ゆ立ゆ
よ當寺よある不のかゆひり其ゆ後ゆ少四十有
徳治ゆれも区ゆよ後ゆ
余年ゆり最不審ゆからと

抑當寺い正法眼藏の妙理を志ゆ實相無相の心印をひらく向上の一路

まゝ着相實有の草を拂ひ言下の一喝まゝ異響狐鮮の塵を掃と云案
の床の前まゝ一千七百の則を重て以心傳心を付く坐禪の食のりとまゝ朝と
暮四の眼を浮く文字言句の話頭を離たる

淺茅原　總泉寺大門のあらをりの

田園雜記　淺茅ヶ原とゝ云る不よて

人めさくあれて樹〻れ夕まくれ淺茅ヶ原の霜をわけつゝ　道真准后

妙亀塚

は不よあり梅若丸の母妙亀尼の墳墓なりとのひまゝふ所ところ草堂を建て
妙亀大明神と稱ずるなり

古墳一基

妙亀堂のうしろよあり青き一尼の石まて長二尺あまり碑面蓮花の上四相の中ゝ法印と
云号をちらしめりゝ弘安十一年四月廿二日と彫刻てあり　此年冬月改元あり
巻六第四十二ゝ云ゝ加撰二年六月廿二日此年十二月改元あり　山門の衆徒美濃軍を率て大谷御堂の墳墓を破却せん
とて其夜法蓮坊覺西坊濃ゝ上人の櫃を負出て蓮生坊信生坊及法西坊東氏の從兵五位中
道遍坊法谷七郎　西佛坊顯寂法師の妻出家の身なりしかとも法衣を著し樹を帶し鬼神の表
逐坊四宮坊等ゝ云ゝ記せり按ずるに法然ゝ入滅六年後の建暦二年六月廿二日此年十二月改元あり
廟六年　徹通の弟子なりとの古墳なるべし
この法印の墓碑なるべし

鏡ヶ池

同所西南の方ゝあり傳ゝ云妙亀尼梅若丸の跡を尋ゝ京ゝ
さ向ゝひ来ゝしゝ梅若丸身まゝ臥まゝを冥ゝく此池ゝ身を投てむれゝしゝく
あゝぬとゝ

元禄年板の江戸鹿まゝとゝる草紙ゝむりゝ
此池を同の池と名けゝしゝとあゝ

傍ゝ鏡池庵と号る小菴あゝ

辯財天を安ゝ是も妙亀尼をまゝる不よるゝとゝ

袈裟懸松

池の傍ゝあり一名を夜ゝけ松ゝもゝ妙亀尼ゝの松の松ゝ衣をゝけ垂てゝかけゝしゝく

采女塚

は不よあり寛文の頃吉原町ゝ移めゝとゝる妓女ゝ夜ゝもきゝれてゝくゝ
采ゝ池中ゝ身をゝなげゝしゝくゝ夜明てゝゝあゝぬ夜明てゝゝあゝるゝ不よゝゝの松
小小袖をゝ一首のゝをゝくゝ

名をそれとゝゝとゝもゝれ猿澤のあゝとゝゝ
ゝゝあゝるゝ采女ゝゝをゝゝゝ池ゝ名をゝゝゝゝゝ

東野先生之墓

同所橋場の通り福壽院とゝる禪林ゝあり先生ゝ諱ゝ爾圖東壁ゝ字
在文ゝ通ゝ稱ゝ復古ゝ学ゝ唱ゝ墓碑の銘ゝ
仁左ゝ衛ゝ門ゝ秀ゝ安藤ゝ養家ゝ姓ゝ東氏ゝ名ゝ須氏ゝ祖徠先生ゝ就ゝ大ゝ
南郭服夫ゝ述ゝ所ゝ其文ゝ如ゝ

歸命山法源寺　毎量壽院と号ゝ浄業の古刹ゝ總泉寺の南ゝ隣る

宝亀元年庚戌の春智海法印始て粗ゝ大日堂を建立ゝ其後延暦
三年甲子の秋村里の人民力を合て一宇の梵刹ゝ砂尾石濱の道場
と号ゝ
宝尖僧智海法印ゝ宝亀元年庚戌三月十四日化寂ゝ世權大僧都法印ゝ天長七年庚戌四月
十五日歸寂ゝ三世恵海法印ゝ承衡元年甲戌四月十九日歸寂ゝ各ゝ墳墓ゝあり
隆性院從二位藤原朝臣四辻有俊卿墓碑　紫雲寺境内ゝあり再按江戸砂尾ゝ延暦元年己
の碑ゝ漸ゝ四辻家の姓名二人の官名實系ゝ明ゝ天六月廿七日ゝ
其来由もまゝ明ゝゝ云寺伝もゝゝゝゝゝ

按ずるに藩拙記に西園寺大政大臣公経公の四男四辻権大納言公氏卿の二位公貞の實孫なり十五世の孫権大納言公氏卿の二位公貞より十五世の孫権大納言公氏卿の二位公貞より永仁の頃の人にして四辻家の祖なり延慶の時世延宝五年丁巳六月廿七日薨去六十八とあり實孫なり延慶より延宝八年八五年乙巳に当れり延慶の時世大なるに拙くして後に位に二位に昇りたるなり延慶八年乙巳の頃なるべきなり薨去の日附合せりされど文字剝缺して讀へがたし

齋藤別當實盛墓

後五位徳山覚道真大居士寿永二癸卯年九月七日と刻し墓に七世の住侶法号上人元泰和尚元禄七甲戌年甲戌五月廿一日夜霊夢を感し孫兵庫助信利是を建立せりと誌せり法号上人は實盛の氏族なるよし南向亭茶話にえたり法名は其頃新に命じ賜へるなり

鎌倉権大夫景道石塔

景道は所々にあり禅面向阿弥陀佛徳樂延久二庚戌年十月廿二日とあり之五輪の石塔なるこの造立せりしんあと景道は鎮守府将軍良兼四代の孫左衛門尉致経の二男村岡小五郎忠通の子なり其余當寺歴代住侶の石塔まさに寿永二癸卯年九月七日と刻し墓に七世の住侶法号を刻せり古墳のうちも印塔の中より発掘されたるなり近年散失して多くなり

當寺は天台宗の古跡にして保元年間中興して保元寺と号し後の遠の後大に荒廃せり明蓮社聰誉上人西仰和尚の時より合宗を改めて浄家小溝を其時より文字も法源あり寺院再興ありしと云

を藏せり今按ずるに文字保元寺と作る又境内に弥陀移至観音一光三尊の像を刻し中古本尊色林印の五字を中古裏に慶長二年武州保元寺とある古墳あり疑とせり

深榮山長昌寺　法源寺の南に隣る當寺は御府内日蓮宗の古跡にして延山

小屬なり冠山日寂上人は始浅草寺の住職なり上古は天台の法流を汲み寂海法印と号せり弘安二年己卯始て日蓮上人の弟子日常上人と宗義を討論せり日常は総国中山妙法華寺の冠山なり後小日蓮の宗風に帰し身延山に登りて宗祖上人に謁し弟子の禮を執り名を日寂と改め浅草に帰り金龍を辞して庵をむすび妙昌寺と号せり隱る後の所の両僧も又とも小受戒して日増日可と改む同九年丙戌十月一日日寂上人帰寂せり墳墓境内にあり中古迷失せりとなり

依て其後日増　日可

長昌寺と号し當寺新鑄の鐘の銘に其地元隅田川に接し偶水難に罹堂塔漂流鐘亦沈没せり其所を撞の淵とのみ孫元亨元年辛酉寺を今の地に移せりとあり

按ずるに撞の淵の来由は亀戸村普門院の境内の池なりと称し七巻日撞の淵の条にも見えたり

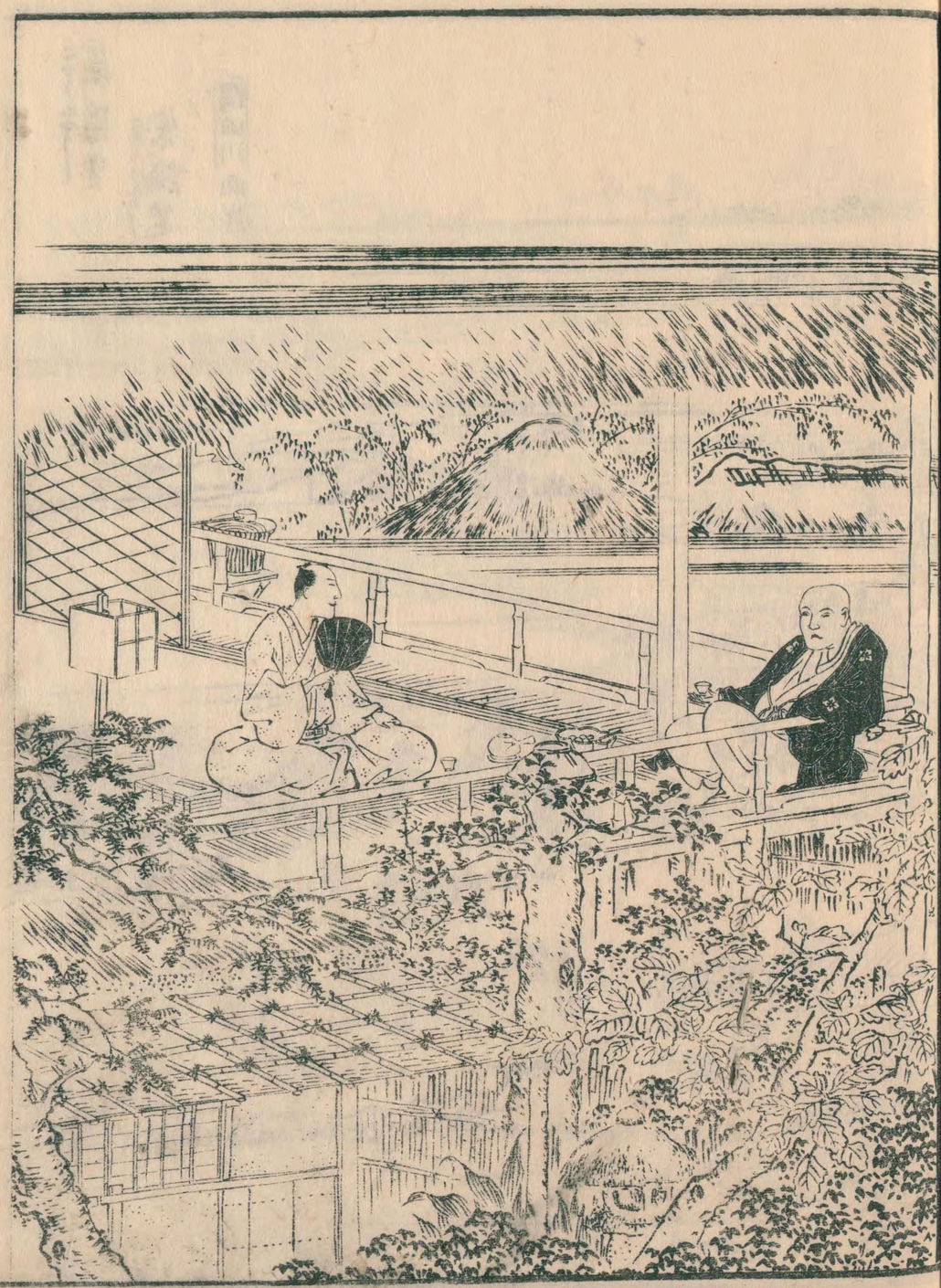
宗論芝

本堂のまへにあり扇の形に作りたる芝生の中央に松樹一株あり寂海法印宮本の日常師に執て宗教を叩元竟に日蓮大士の弘法に帰し一證を永世に示さんためなり

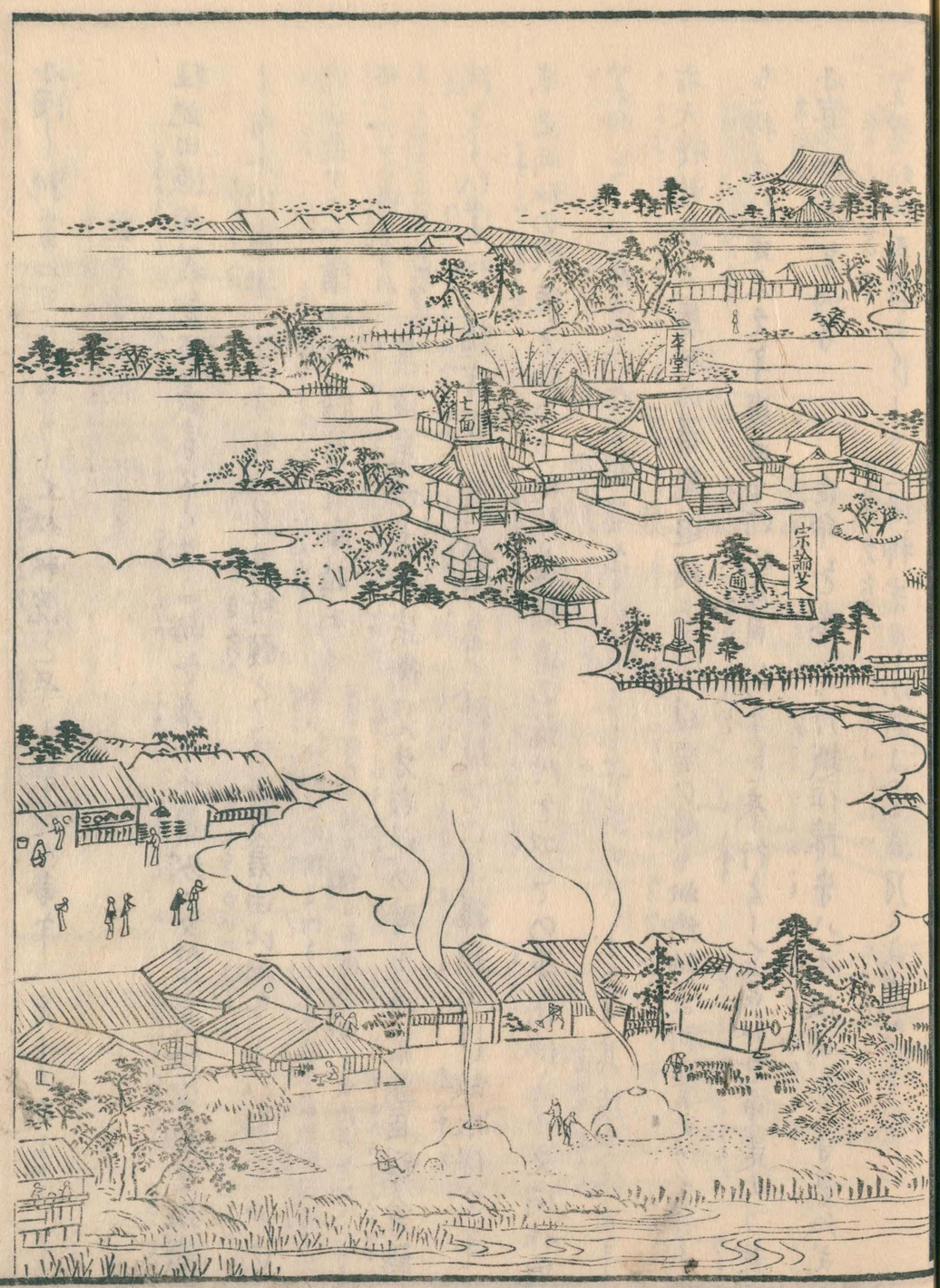
今戸八幡宮　今戸橋より一丁ばかり北の方道に左にあり祭神山城國石清水

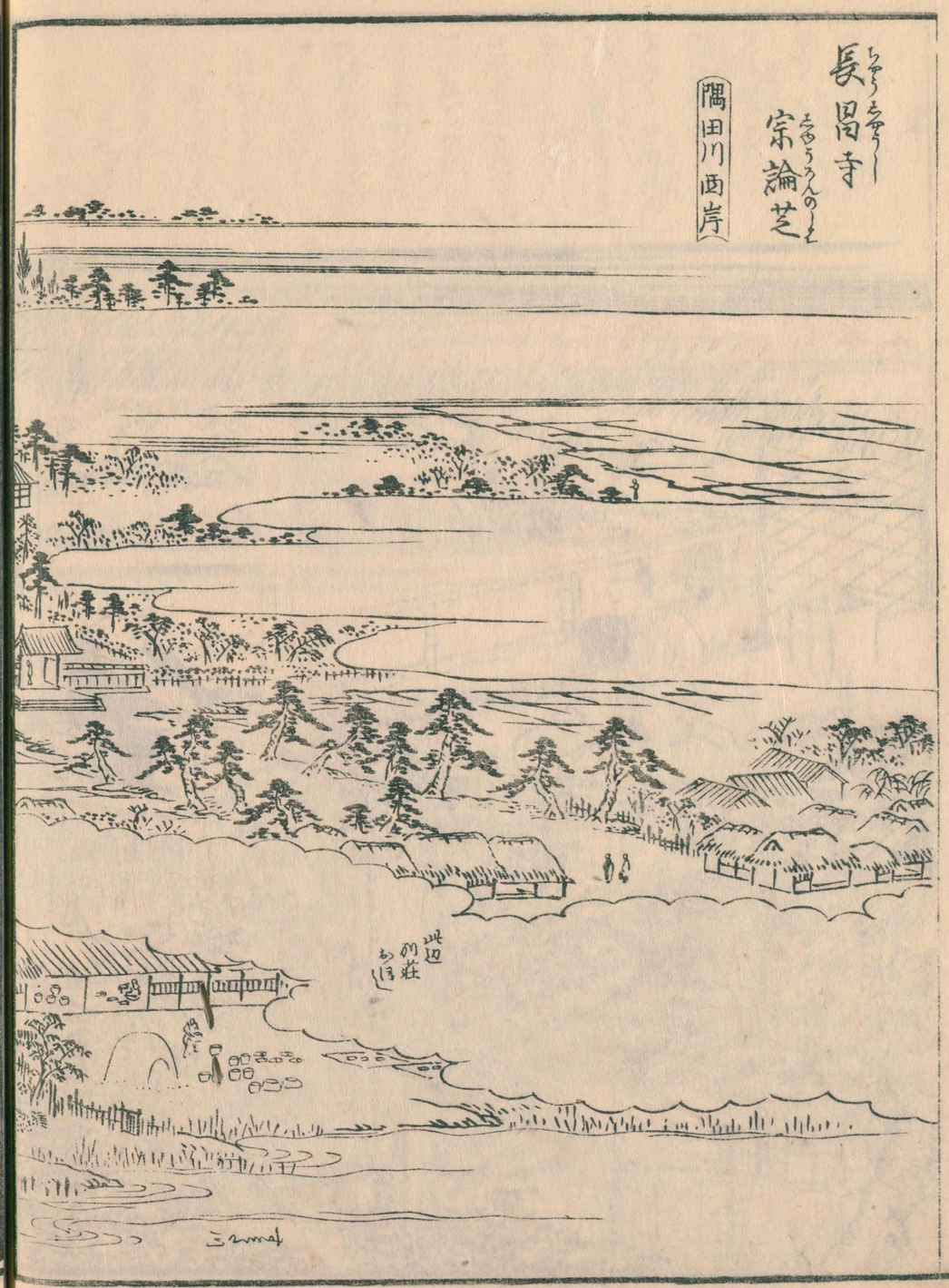
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

くひる
水鶏い橋場の
のくろ[illegible]佃嶋
を佳境とせり
源氏物語にも
あの〳〵よき秋の
花紅葉のさゝり
あるようにたく
そとろとあるう
ちけれるあけとも
るまあり
ひみのうちたくた
たるうたりあと
さうとあるれよ
なれ田とう
ちるされ
そへうし



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

小岡〳〵別當八天台宗〳〵と松林院と号と祭禮い毎年八月十五日……く
放生會を修行ヒと
社記曰源頼義朝臣義家父と共よ勅を奉〳〵奥州安倍貞任宗任を誅戮
くゆゑ仍康平六年癸卯八月其祈願と〳〵鎌倉由比郷をよゝ牡今戸の
地よ至て石清水八幡宮を勧請あり（今戸社記ょ今津ょ作る小岡原北条家の分限帳ア内宮内少輔所領ょ石濱今津と云地名を加へたるを按ょ津戸ハ通音なれハ今戸と云ひるら也）其後奥州武衡宗衡兄弟叛逆の時も義家朝臣鎌倉鶴岡をよゝ當社八幡宮等ょ祈願あて賊徒を亡〳〵勝利あり故永保元年
辛酉両社の修造を加へられ行基彫造の弥陀を以て本地佛と〳〵又同作の
薬師をよゝ慈覚の作の観音等の像をも安置あり其後文治五年
右大將頼朝公奥州の泰衡追討と〳〵て進発の時も此御神ょ祈誓あり〳〵勝利
を得ゆゑ建久元年庚戌下河辺庄司行平を奉行と〳〵て宮社を重建あり然
ル寛永十二年丙子　合命を奉〳〵舟越伊豫守八木但馬守等是祭司
ヒ當社御再興あり〳〵降神光明ル新ょ霊威明〳〵ょ盛なり

今戸八幡宮
隅田川西岸

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

今戸焼

此辺職者陶器通ありて是を産業とする故今戸焼と称す

元禄二年七月三日隅田川絵ゆ

土をこねはこぶ人もなれい
ものぬるる
雲や
いとくもむ
や尾
秋風

霊亀山慶養寺

同く南の方今戸橋の北の結よあり曹洞流の禅刹なり

冠山を羽山良察和尚とゝ

黄檗元鳥越西福寺の隣ふり後本堂なり

總門の額霊亀山

の三字は頤齋の筆れを辨財天社境内よあり本尊は弘法大師唐より携来の

霊像なりとゝ

当寺元鳥越の地よりし時伊丹左京丹川采女とゝる両人の壮士敬ありて討果したるなり

真土山

今戸橋の南の結よあり

当寺什物の藻屑物語とゝる草紙に詳なり

待乳山

作る或信土山作る万葉集ふ示打

沙門契沖ゝ示打山と書てまちゝとゝ

万葉集

多賀の浦はまれいとゝ云云

示打山暮越行而廬前乃角太河原爾獨可毛将宿　弁基

建保名所百首

今宵まゝ誰宿めらん庵磯の隅田川原の秋の月哉　須徳院

月影のさゝとや菴磯すゝ河越てまちゝ山の秋ひとゝ　家隆

新千載

誰よゝもゝとゝいとゝむまちゝ山夕越行人もれし　定實

秋風抄

風冷ちゝ山夕越行人風寒ゝすゝたゝ河原ふ鳥れくゝ　季廣

回國雑記　道ゝゝゝ名所とも多ゝゝゝゝふ

まちゝ山とゝゝゝゝ

いとゝ哀ゝゝゝもゝゝゝ東路のまちゝの出ふゝいまぬらん　道與准后

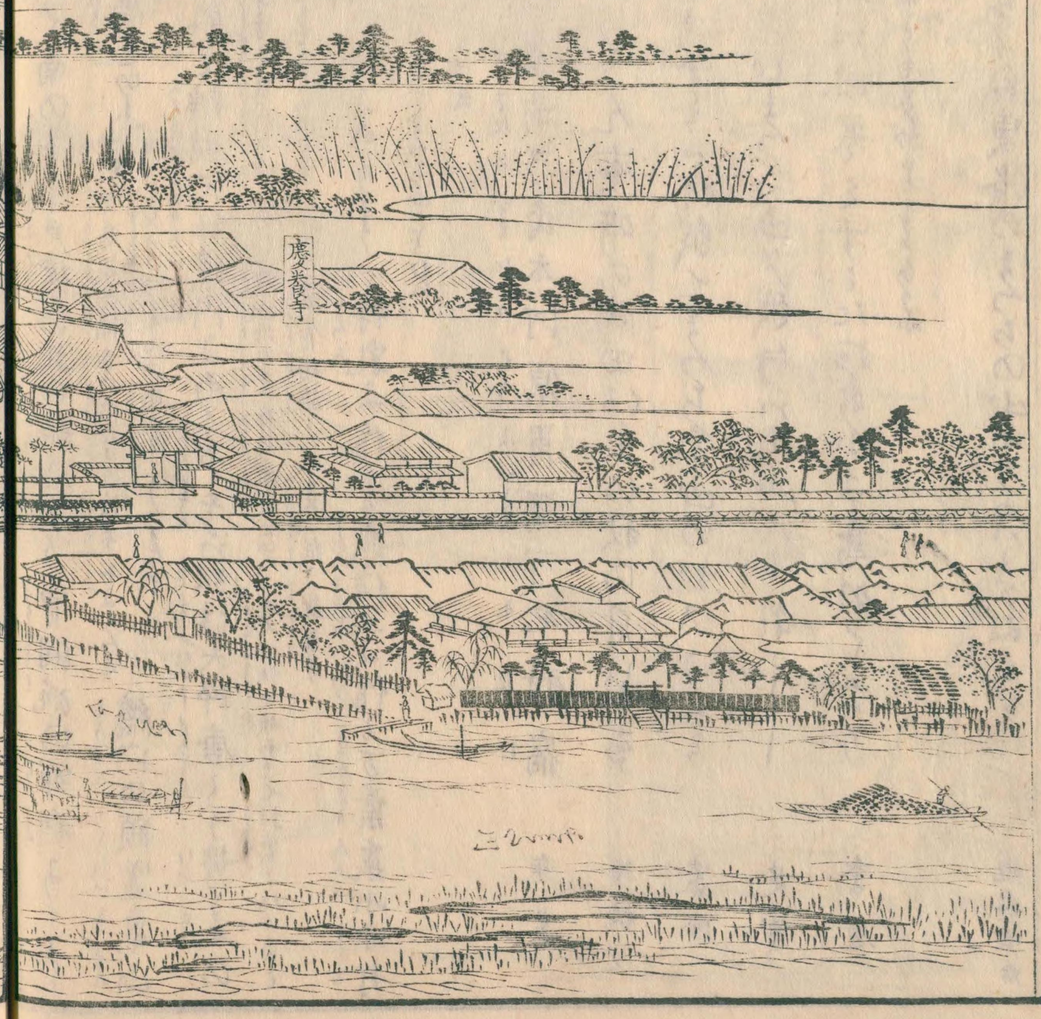
山谷堀
隅田川西岸

今戸橋

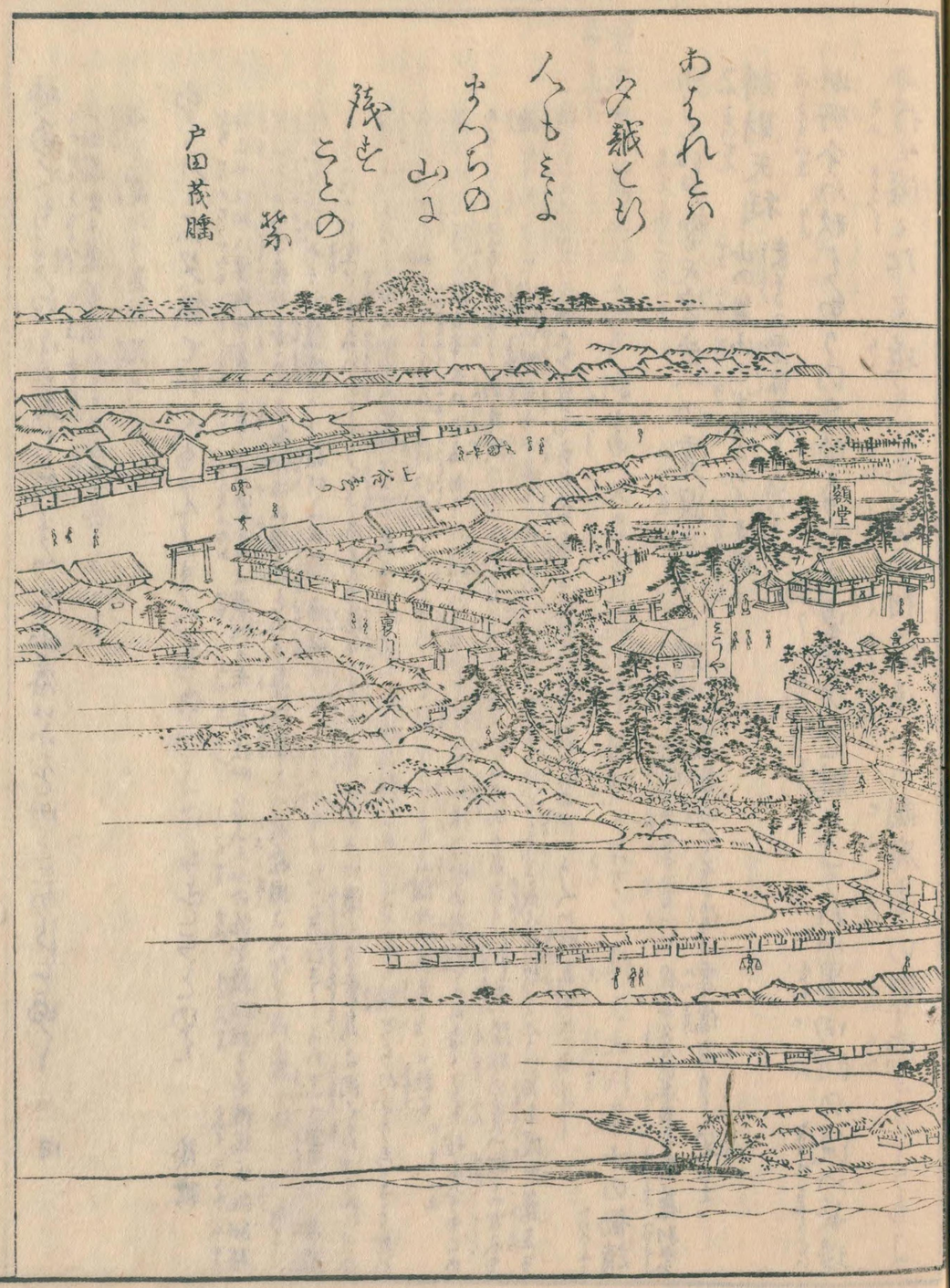
慶養寺

待乳ちつんと。橋のうとむ今戸橋。
土手の相傘。片ゑくぼ。
かくれの夕時雨。
君をかりへ。ぬのの
むりしの細布

右英一蝶戯作



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

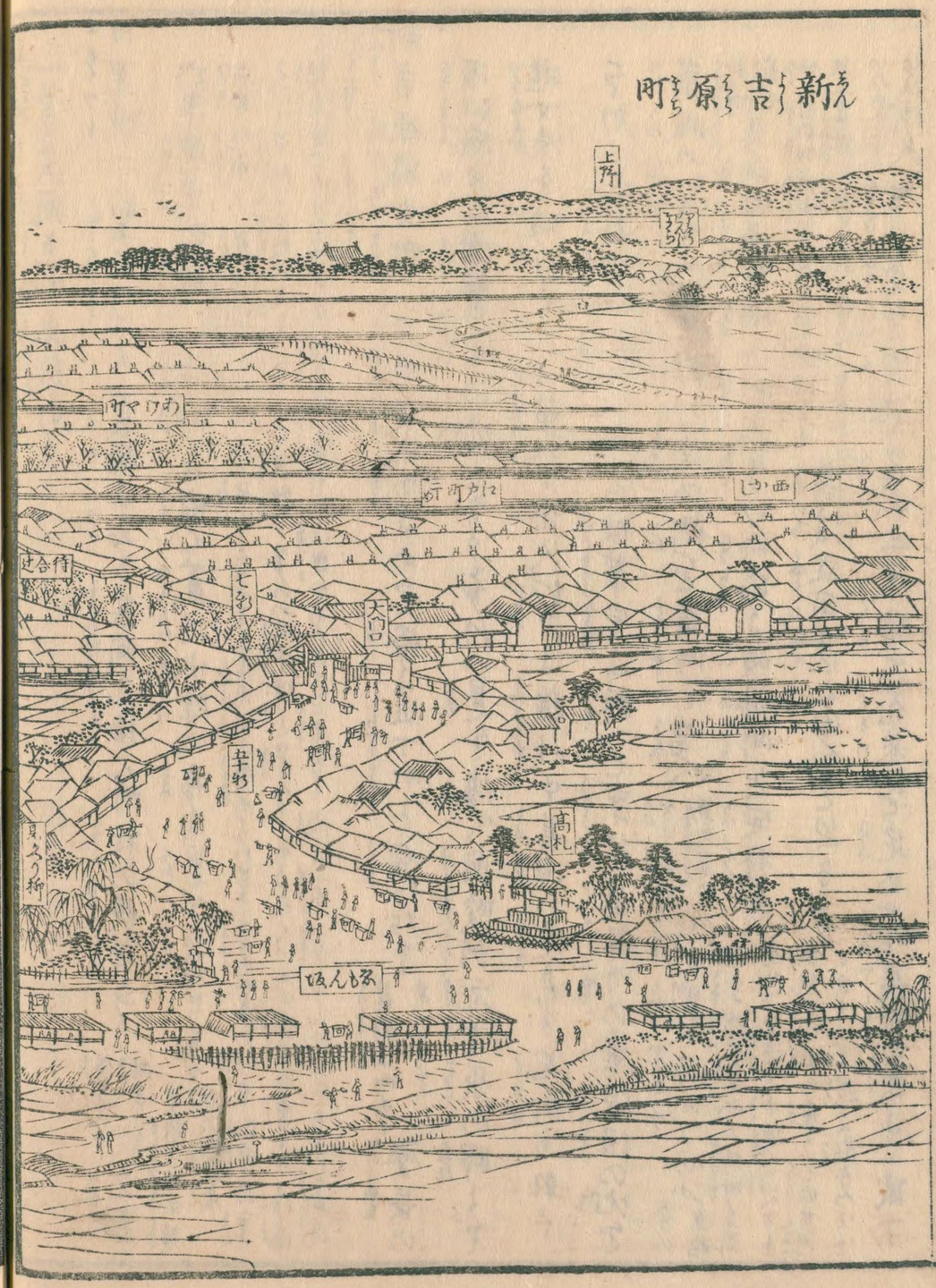
時雨とも[illegible]ぬまつち山落葉を時とこめしとぞ思ふ　日

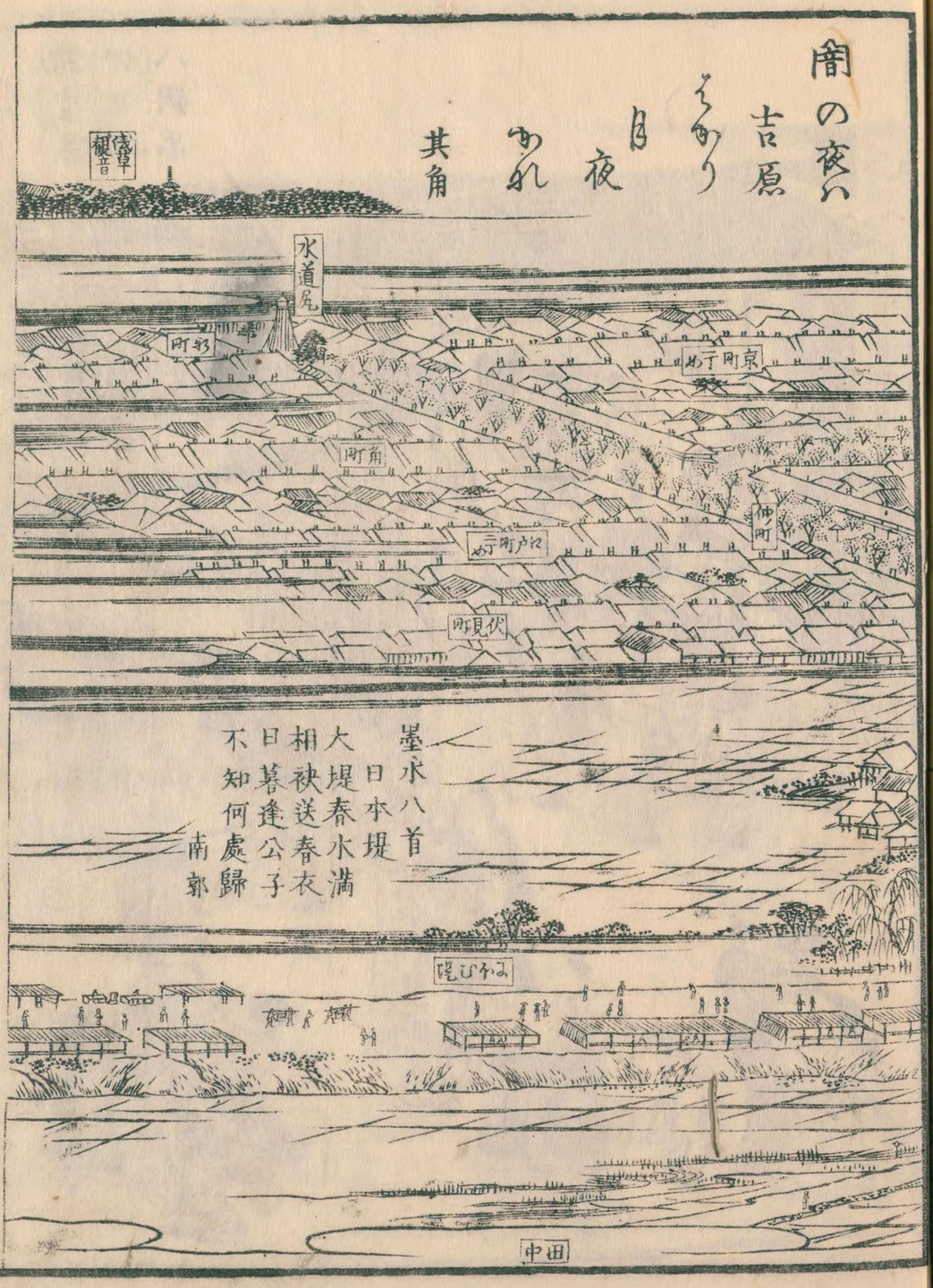
戸田茶光入道蔵瞻聖天の宮のおさうらを
碑を建たり其碑面さ

あくれとも紙と行人もえよまつちの山のとゝとゝとのゝ　茂瞻

按ふ井桂抄八雲御抄等の書に万葉集に載たる赤基法師の歌を駿河国に在て催馬楽注紙抄
宗祇の名和方角抄等に大和紀行の國境とあり藻汐草に武蔵国に入なと或書に云く大和て
信土山角田川あり盧崎あり駿河に隅田川庵崎あり[illegible]土山角田川菴崎
[illegible]ありて全く[illegible]れとも[illegible]
[illegible]
赤基法師の和歌も[illegible]
菊岡沾涼云く往古本不の辺海面より頃い当山を[illegible]
[illegible]新島紙の地を山谷といふ[illegible]
論[illegible]
頃この当土山のあたりの土を穿ち[illegible]

聖天宮　真土山よりあり別当は天台宗金龍山本龍院と号く傳云大同年中の勧請
[illegible]
[illegible]
[illegible]





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57
ガラス使用

839
20
57

四方の地を賜ひ是より吉原町と号く　今所謂和泉町高砂町住吉町難波町等其間地なり
なるを開く故に酸漿もつかへる地を賀して吉原と作と或は事跡合考をもひあらはし
元禄年紀の江戸鹿子なるの書あり其始末の沿革を吉原ようと故に号くさの号あり
落成を終て江府益繁昌し人物夢を為れい明暦二年の冬に竟て今の
所なり暦地を賜ふ　明暦三年丁酉八月令の地なる　依て新吉原町と号るといへ共柳花柳いまとこと
小三都の魁たりと其賑ひ特弥生の花の頃をもつて勝たりと春宵一刻の價
千金を顧と初秋の燈籠は万字屋の玉菊を追福まさしまを八朔の白重ハ
巴屋の高格を起る今も牡月をもつて更衣の節とを名よく毋ハ二度の月えの
全盛ハいつもさらるを悪く其美を擧ハいとまあくを忘らく勝処なり
是を畧と

江戸名所圖會開陽之巻終

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 839-57

ガラス使用